中學生のしつけ

たとひ何處にあつても、又どんな思ひをしてをつても、如來は、私達の胸底深い所から、私を保護し、監督して、みてをつて下さることをいふのである。

福島縣の田舍に或厚信な富豪があつた、至つて物堅い家で、何事も昔風な躾をして一家を治めてゐた、所が其家の一人息子が、福島の中學の寄宿舍に入つてをつたが、或る夏休みに、ツマラヌ小説を五六冊買つて來て、而も、それを書物屋に借金して歸つて來た、之を見つけた父親は、怒るまいことか、直に息子を呼びつけて「貴樣はナゼあんなものを買つてきたか、それも借金して來るとは以ての外だ、直に借金を拂つて來い、けれど、お前に金儲けの出來る筈もないから、今度だけは仕方がないから俺が拂つてやる、けれども、そんな物に、旅費まで出してやることは出來ないから、握り飯でも持つて、トットと歩いて行つて拂つて來い」と叱つて書籍代だけを渡してやつた、息子も仕方がないから、泣く〳〵その金を持つて家を出て行つた、福島の町へは其家から八里の道程がある、息子が出て行つた後で、父親は母親に向ひ「おいお前は、あれに旅費をやつてくれたかい」と尋ねた、母親は「貴方がやられないと、仰やつたから、やりませなんだ」といふ、これを聞くと父親は「馬鹿者め……」と母親を叱つて泣いた、「おれがやらぬ、と云つても、お前が蔭で氣をきかして、やつてくれなければ、アレの身が立つか、汽車賃も小遣ひも無しで、八里の道がどうして行けると思ふか、早く番頭に持たせてやれ」と云つた、番頭は、早速金を持つて跡を追ひかけ「オーイ、坊ちやん、貴方はこの暑いのに、福島三界まで、歩いて行けると思ひますか、アノ此れをお母さんがね」と云つて、汽車賃と小遣錢とを渡しますと、とても汽車に乘れないと思つて居つた處へ、母の情深い親切を聞いて、地べたにひざまづいて、我家の方角へ手を合はせて拜んで泣き出した、「番頭、家に歸つたら、御母さんに、もう、これからは御心配はかけませぬと、よろしく傳へてくれ」と云つたそうである。

八、一人の我が子を一人前にするのにも、親は並大抵ではない、慈悲で愛するばかりが能ではない、また智慧で叱るばかりが教育でもない、或る時は嚴しく叱り、或る時は撫でゝ、智慧と慈悲の心づくしで、はじめて立派に子供が育つのである、如來の心光は、一面には智恵と、一面には慈悲と、この二つをもつて、常に私達を照護し給ふのである。

智慧と慈悲と

仍つて、攝取の心光は、私達が過つて罪の道に行かんとする時は、直ちに我が前に劍をとりて立ち、恐ろしきお姿となり給ふこともあり、また、その煩惱の誘惑に敗れて、自己の弱きに泣く時は、慈愛あふるゝ圓滿のお姿ともなり給ふのである、如來はかくして我が闇路をてらし、育てゝ私達をして、佛にまで完成して下さるまではお護りの手を休められないのであります。

第十七講　日光と雲霧

一、前述の如く、私達は、永劫の昔から、智恵のまなこがくらみ、無明の闇にとぢられて、久しく阿彌陀如來の本願の眞實を疑ふてをつたのであつたが、幸ひにして如來の光明の御はたらきに育てられて、ひとたび南無阿彌陀佛の御名の御救ひに觸れるや、無明疑惑の闇は、明らかに打ち破られて、いまはほがらかなる佛智の上に、身も心も安んずることを得るのであります。

已能雖破無明闇

二、それでは、信の一念に心光の照護を感じ、無始以來の無明や疑ひの闇が破られたのなれば、いつも心から落ちついて、たえず歡びがつゞくかといふに、吾等の現實はなか〳〵そうはゆかぬのであります、信心を獲た後と雖も、貪慾、瞋恚の煩惱は相變らず起るのであります、そこを本偈に「已に能く無明の闇を破すと雖も、貪愛瞋惛の雲霧は、常に眞實信心の天を覆へり」と仰せられたのである。

貪愛瞋憎之雲霧

三、「已に」とは、無始以來の過去をいふのであります、「無明の闇」とは阿彌陀如來の本願を疑ふたこゝろであります、「無明の闇を破ると雖も」とは、無始以來の愚痴のくらやみの心が、佛智の光りに照されて一點の疑ひも起らぬ身になつたけれども、といふ意味であります。

四、「貪愛」とは貪慾、愛慾である、「瞋憎」とは、いかり、憎む、こゝろであります、「雲霧」とは、貪慾を雲に喩へ、瞋憎を霧に喩へられたのであります。

五、この貪慾、瞋恚の煩惱は、晝夜不斷に休みなく、起るのであるが、これらは、無明とは別なものでありますから、救ひの害にはならぬのである、「無明」とは、衆生の迷ひの根本であつて、佛智を疑ふこゝろをいふのであります。

六、われらのむねのうちには、いたましいことではあるが、かくの如く貪愛瞋憎等の八萬四千の煩惱の、くもりをもつて、いつも如來のみこゝろを覆ふてをるのであります、この貪慾がはげしくなり、怒り腹立ちがつよくなると、如來の大悲など、殆ど忘れたかのやうになつて、歡びも懺悔も影をかくし、有り難いことも、うれしいことも、なんともないこゝろにさへなる時があります、しかし、かゝる時、心を靜めて我が煩惱の中をのぞけば、奥深いところから、「罪はいかほど、深くとも、我を一心にたのまんものをば、必ず救ふべし」といふ御聲が、內心深くひゞいてくるのであります、この御聲を聞く時、私達は、なんとも言ひやうのない力を感ずるのである、貪愛瞋憎何者ぞ、それらは日光の前の雲霧同樣で、やがて消え去るのである、我が心にめぐまれた佛の心、卽ち信心はどうしてこれらのものに害はれやう、こゝに於て我が信心の光りは、ます〳〵冴へて、力强き歡びと勇氣をおぼゆるのであります。

常覆眞實信心天

七、「眞實信心の天」とは、申す迄もなく、私達の信心の事である、それを、眞實と仰せられたのは、もとより私達の心には、眞實も淸淨もなく、虛假不實の汚れたるものであるが、その心の中へ、聖人の所謂「信心といふは、卽ち本願力廻

向の信心なり」（信巻）と仰せられた、如來よりの頂いた信心、言ひ換ふれば、如來の清淨眞實の御念力が、私達の心に至りとゞいて下されたところのものであるから、眞實信心といふのである。

「天」とは、信心を天に喩へられたのであつて、「天は自在の義、光明の義、清淨の義」で、眞實信心の清淨さを顯はされたのであります。

八、しかし、前には信の一念に、一切の無明煩惱の根が斷たれ、現在に於ては正定聚不退の位に入るとまで仰せられながら、何故、信心を頂いた後までも、かく貪愛、瞋憎が起るのであらうか。

根のない草木

それは、ちやうど、根を切り去つた草木の枝が、數日の間は枯れないやうなもので、私達は信の一念に、願力によつて、一切煩惱の根は、斷たれたのであるけれども、過去、久遠、の昔から、おこし續けてきたところの煩惱の薫習が、强いから根は切られても、なか〳〵消へないのであります、恰も、夜はすでに明けても、夜來の雲霧が、まだ殘つてゐるやうなものである。

九、かくの如く念佛行者のこゝろのうちは、煩惱にみち〳〵て、やみのやうな現實ではあるが、しかもそのやみは全くのやみではなく、やみの底には、あかるい落ちつきがあるのである「譬へば日光が雲霧に覆はるれども、雲霧の下明らかにして闇なきが如し」である、たとへ貪瞋煩惱は常にあれども、一たん如來の救ひに疑ひがはれ、信心決定の身となる上は、雲霧の中より日光が照りかゞやく如く、佛智の不思議は、妄念のこゝろの底に、いつも輝きづめである。

譬如日光覆雲霧

雲霧之下明無闇

一〇、三河の國米津の勘助が、一日、一蓮院師の御化導を聽聞して、腹皷を打つて喜んで歸つたが、勘助つく〳〵思ひ廻らせば、私のいつもの持病はこれである、聞いた時には、腹一ぱい滿足しながら、其後はまたもとのぐづ〳〵で、なんともなしになつてしまふ、之が何よりの氣がゝりである、翌朝また師をたづねて、有りの儘の心中を申上げたところ、師の曰く「勘助よ、お前は一生これでは〳〵これでは〳〵

と小言を云ふて居つても、如來様はその下から、いつでも、それでも〳〵と仰しやりづめぢやわい」とさとされたそうな。

いかにも有り難い御法話である、聞法の當座は喜ばれても、すぐあとは喜ばれないやうになる、それはなんら往生の障りにならぬ、「これでは〳〵」の小言の下から「それでも〳〵」の念佛に生きかへるところに信仰の妙味が溢れてをります。（拙著信仰坐談、本當に喜びが出ませぬを參照を乞ふ）

第十八講　信心を獲る方法と其はたらき

獲信見敬大慶喜　信を獲て見て敬ひ大きに慶喜すれば、

一、「獲信」――とは、獲得信心といふことで、信心を獲ることであります。

二、印度の聖者、龍樹菩薩は「佛法の大海には、信をもつて能入とす」と仰せられた如く、佛教に限らず、凡ての宗教に「信」を勸めないものはないのである、然しながら、世間一般の信心は、自己の心を誠にして、その誠が、神や佛に感應して、それから御利益を戴かうとしてをるのが常である、かの菅公の「心だに誠の道に契ひなば、祈らずとても神や守らん」と、詠んだ如くである、併し、これは中々〳〵六かしいことである、私達は、如何なる場合に於ても、誠の道に契ふ心を持ちつゞけることが出來るであらうか、いつも浮草のやうに移りやすい、變りやすいのが人間の心であるまいか、昨日胸に咲かせた美しい信の花も、今日は怒りの暴風によつて散らしてしまふやうな有りさまである、涙ぐましい思ひから、互に手を握りあつた我と人との間にむすんだ信はいふに及ばず、神や佛にむかひたてまつゝた信仰でさへも、月日のたつに從つて、多くは、うつろひ易いものである、卽ち、道綽禪師の申されし「若しは存し、若しは亡ぶ」の信心である。

三、仍て、親鸞聖人は、信卷に「一切の群生海、無始よりこのかた、乃至、今日今時にいたるまで、穢惡汚染にして、清淨の心なく、虛假諂僞にして、眞實の心なし」と、告白せられて、私達の力によつてつくる信心は、決して純眞無雜なものでなく、眞實なものではないと、喝破せられたのであります。

四、それでは「信心とはどんなものであるか」、いま拙著『信仰坐談』の問答の一節をこゝに記してみます。

一、信心の實體……佛心

問、私はどうかして早く御信心が頂きたいと思ひ、よく寺へも參り、說教も聞くのですが、未だに信心が頂けないので困つてをります、どうすれば信心が頂かれませうか。

答、誰でもよくそんな事をいはれますが、寺へ詣つてどれ程よく說教を聞いたつて御信心が耳から飛びこんで來るものではない、又我々の心の中に別に變つた精神が說教に依つて出來るものでもありません、信心を獲得するといふことは、我々凡夫の心の上に既に注がれてある佛心、卽ち、如來の私達を救はんとする願心が、我々凡夫の心の中より發動するすがたをいふので、言ひかふれば、私達の凡夫の心の中より如來心が、一念發起と湧き上つてくださつたすがたを味得することを信心を得るといふのですよ。

問、一寸お待ち下さい、佛心が私達凡夫の心より發起する、湧き出る、と申されても私の心は罪業深重で、穢いものが一ぱいです、どこにそんな佛心と名けられる樣な綺麗な心がムいませうか、私の心より發動するものは煩惱惡業ばかりではムいますまいか。

答、それは私も同感です、我々の心の中は惡業煩惱よりほかは有ません、そこで如來は我々に代つて法藏比丘となつて五兆の願行を修し、我々の佛となるべき佛性を造り上げ、之を凡夫に與へて佛に成る因を下さるのではありませんか、言

ひかふれば、阿彌陀如來卽ち盡十方無碍光如來より廻施せらるゝ佛光、卽ち佛心が我々凡夫の獨り〳〵の內心の奧底に浸み込んできて下さるのである、之は二千年來、龍樹、天親、曇鸞等の發表せられたる信念であつて、また我親鸞聖人の信念であります、依つて、私達が、やむにやまれぬ求道が起り、如來に救ひを求む る心の起るに到つたみなもとは、實にこの盡十方無碍光如來より直射したまふ佛の光明卽ち吾々を救はねばおかぬの佛心——如來選擇の願心より勃發したるたまものであります、この光明を蒙ることなくして、どうして我々は法を求むる心が起りませうぞ、あなたがいま信心を得たいとあせる心も全くこの佛心の力から發動してゐられるのです、蓮師は我々の「信ずる心も、念ずる心も、みな彌陀如來の御方便より起さしむるものなりと思ふべし」と敎へられました、最要抄には「信心といふ二字を、まことの心とよむうへは凡夫の迷心に非ず、全く佛心なり」と記され、親鸞聖人は「信樂を開發することは、如來選擇の願心より發起するものだ」と宣言せられてゐます、善導大師は我々凡夫の心を水火の二河に譬へて、其中に惠與せられたる佛心を四五寸ばかりの白道として語られてあります、要するに信心の實體卽ち本質は如來心——願心——であつて其佛心が我々の心の中より發起したるものを信心といふのであることは御了解が出來たことゝ思ひます。

獲信の方法

二、獲信の方法……聞法と反省

問、お蔭で信心の體はよく分りましたが、夫では說敎を聞く必要はムいませんか。

答、そこが最も大事ですよ、やがて信心となるべき佛心の因は如來よりめぐまれてあれど、之を開發すべき敎養、卽ち信心を獲る方法を敎ふる聞法の緣がなくては、何時迄經つても信心の果は得られませぬ、そこでよく說敎を聞き、善知識の敎養を仰いで、其敎の如く自己を內省する所に佛心が開發してくるのであります、喩へば、佛心は地下を流るゝ水筋のやうなもので、何れの地の下にも水は流

れてゐると知つてゐても、土や砂を掘りあげて、井戸を掘らねば水は湧き出さぬ如く、掘り下げ〳〵するうちに遂に水筋に當つて、そこより井戸の口にそふて自然と水が湧き出るのでせう、依つて我々も百冊の書物を讀むよりも毎度聽聞を重ねる方が信心開發には早道です、卽ち聞法の重なるに隨つて內省の心が深まり、我身の淺間しさが益々知られてきて、愈〻地獄一定と落ち切りますと、そこにやるせない大悲の佛心が味はれてきて、自然と計らひなしに、ひとりでに念佛が涌き出て、おのづと阿彌陀佛に南無したてまつる歸命の一念が生れるのであります、この心境は全く聞法卽ち善知識の敎養と自己內省に依らねば分らぬ境地です。

三、信心の相……無我、佛心中心生活

問、これまでは全く方角違ひをしてをりました、たゞ外側ばかりに信心を探し求めてをつたものですから、迷つてばかりをつたのです、いまはじめて佛心に出會ふたこゝちがいたします、信を獲た心持は信前とはかはつてくるものでムりませうね。

答、獲信の相ですか、そうですねえ、先づ信前には自己の計らひばかりであつたものが、すべて自己の小我を捨てゝ、如來の心に生きる卽ち大我に生きるやうになりますと信前には自我が主人であつたものが信を獲てみれば、自己の中心生命には南無阿彌陀佛が主人となつてまゐります、これ迄は我が食ひ我が着我が行ふて、惡いことは他人のことにして省みなかつた生活が獲信の上は、お蔭樣で着せて頂き、食はせて頂き、勤めさせて頂き、善い事をした時は如來の力と感謝し、惡い事をした時は自己の相を懺悔するやうになりますよ、時々我慢が出て佛心に反抗せんとして泣く事もあるが、また念佛に依つて懺悔させて頂く樣になります。

五、而してその信心から「見て敬ひ、大に慶喜する」こゝろが現はれてくるのです、聞信の一念から、南無阿彌陀佛の御力一つによつて、この逆惡の凡夫を、

お救ひ下さる事を思へば、尊重敬慕せずにをれない心が涌いてくるのであります。

「見敬」とは、見に「眼見」と「心見」との二つがあつて、眼見とは、肉眼で南無阿彌陀佛のすがたである繪像木像を見奉つて敬ふ事であり、心見とは心に法藏菩薩の願力、南無阿彌陀佛の大慈大悲を思ひ浮べて尊重恭敬する事で有ります。

六、「大慶喜」とは、聖人は御消息集に、

「慶喜とまふしさふらふことは、他力の信心を得て、往生を一定して、おのづとよろこぶこゝろを申すなり」と仰せられ、如來の大願業力によつて、往生させて頂く事を喜ぶ心である、所謂、大經の「信心歡喜」の事である、信心は必ず喜びの思ひが添ふのである、それは小さな喜びにあらず、廣大難思の喜びである、依つていま「大」の字を入れて「大慶喜」と仰せられたのであります。

七、私達は、幸ひにして禽獸と生れずして人間に生れしことが何より大なる喜

びである、然も人間と生れてかくの如く佛法に逢ひしことは、これ無上の喜びであります、たとひ貧乏して乞食になつても、惡い病氣にかゝつて身體は腐るとも、一度この信心を獲奉れば、未來は極樂に往生することが出來るのである、今生に於て、どれほど身體は壯健にして、美しく富み榮へて、何もかも思ふやうになつても、死後に地獄に落ちては實に殘念至極である、かく感じ來れば、信心を獲たるものは、無限の御恩と無上の喜が湧きあがつてくるのであります。

第十九講　横超の直道

卽横超截五惡趣　卽ち横に五惡趣を超截す。

一、ひとたび信心の天地に入つて見れば、南無阿彌陀佛と一つになつたのであ

るから、もはや墮落はない退歩はない、たゞ向上のみ進歩のみである、現在から正定聚の地位に入れられ、未來には常住永遠の佛陀と成るのである、依つて死後には五惡趣といふ五つの惡き迷ひの世界へ趣くべき道が、現在獲信の一念に斷ちきられるのである、「五惡趣」とは、

即横超截五惡趣

一には地獄界、これは刑罰の世界で、百鬼羅刹に苦しめられるところである。
二には餓鬼界、これは饑餓に惱む世界で、水を火とみねばならぬ樣な所である。
三には畜生界、これは嚙み合ひ衝き合ひ喰合をする爭鬪のやまぬ境界である。
四には人間界、これは我々の住む世界で、樂と苦と相半してをる所である。
五には天上界、これは樂のみある世界であるが、淨土に比ぶれば惡趣である。

二、大體、私達は、自己の造る所の惡業煩惱が、因果的法則に引かれて、此の五つの迷界の間を流轉して、種々の苦しみを受けてをるのが現在である、そこでこの惡趣の境界よりのがれ出でんとするには、それ〴〵の修行をして、罪の根元

を消し、善根を積まねばならぬ、即ち、苦集滅道の四諦を修して聲聞となり、十二因緣を觀じて緣覺となり、六度萬行を行じて菩薩となり、三祇百大劫の間苦しんでゆかねば成佛は出來ないのである、之を「竪の修行」といふのであります。

竪の修行

三、然るに阿彌陀如來の大生命を感得し、南無阿彌陀佛の御力に、全運命を乘托したる信心の行者は、この五つの迷界を脫して、順々に竪の道を進むべき必要がなく、願力の不思議を以て横の近道より、一足とびに佛になるのであるから、この意味に於て我が他力敎のことを、「横超の直道」ともいふのであります、聖人は銘文に「横超」の二字を、

横超の直道

「横超といふは、横は如來の願力他力をまうすなり、超は生死の大海をやすくこゑて、無上大涅槃の都にいるなり」と、仰せられ、蓮如上人は御文章に、

「されば五道六道といへる惡趣にすでにおもむくべきみちを彌陀如來の願力の不思議として、これをふさぎ給ふなり、このいはれをまた經には、横截五惡趣、惡

趣自然閉ととかれたり、かるがゆへに、如來の誓願を信じて、一念の疑心なき時は、いかに地獄へおちんと思ふとも、彌陀如來の攝取の光明におさめとられまいらせたらん身はわがはからひにて地獄へもおちちずして、極樂にまゐるべき身なるがゆへなり」と述べられてあります。

四、或る、古德はこの横超の「横」の字を解釋して、「横とは理に順はざるなり」と記してあります、罪業深重の徒ら者が、たゞ、歸命の一念に、たちどころに生死の迷界を脱れて、現在に於ては正定聚の菩薩の位に入り、未來は、佛になるといふことは、一應の道理にあてはまらないやうである、前にいへる如く、三大僧祇の修行を積み、五十二段の階級を經て、佛果に至るといふが、因果的、佛教の規則である、然るに、三大僧祇の修行を信の一念に飛び超へ、五十二段の階級を、助けたまへの一ことで埒をあけて頂くといふことは、全く因果の規則に合はぬ、思ひがけぬことである、算盤のけたはづれの本願である、仍つて、佛教の因果律に腹がすわつてをる聖道門の自力根性の人々には、中々この横超他力の謂れが信じられないやうであります。

華嚴の鳳潭師

五、彼の有名なる華嚴の鳳潭は、幼少の頃より才智人に勝れ、叡山に於て三大部の講義の開かれし際、おい〳〵聽衆が減つて、終に鳳潭一人になつた時、師匠は、講義を中止するといふと、鳳潭は、「明日は此の本堂に滿つる程の聽衆をつれて來ますから、どうぞ講義を中止せぬやう」と、たのみ、翌日には伏見人形を本堂に一ぱい幷べて講義を聞いたといふ名高い逸話のある人である、この一事に徵しても、鳳潭は凡庸の僧ではなかつた、鳳潭が深く佛教の精義を究め、釋尊一代の經文を初め、各宗の高僧の殘された聖教まで、のこらず一覽せられし時、我が親鸞聖人の御聖教に限り、三遍讀んでも、五遍讀んでも、その意味が少しもわからぬ、教行信證文類六卷を初め、漢和の聖典殘らず拜見すれども、どうしても要領を得る事が出來ずして、最後に、聖人の『歎異鈔』を繙かれたが、これでます

〳〵分らぬやうになり、

「他の善も要にあらず、念佛にまさる善なきが故に、悪をもおそるべからず、彌陀の本願を妨ぐるほどの悪なきが故に」とか、又、「善人なほ以て往生をなす、況んや悪人をや」と、云ふに至つては、いよ〳〵意味が解らぬので、遂に鳳潭は、

「親鸞聖人の書かれた書物は、まるで氣違ひのやうなことばかりが書いてある」と批評されたそうである、これが、卽ち、聖道自力のまなこをもつて、横超他力の本願をみられたからであります。

算盤のけたはづれ

六、常識的に、善因善果悪因悪果の因果律より、我が他力本願をながめたならば、萬劫立つても、大悲の親心は分らぬのである、親鸞聖人も、

「他力には、義なきを義とすと申すなり」(末燈鈔)と、申されてあります、横超の他力本願は、全く算盤のけたはづれの大慈悲であります、彼の一連院師が、

「この度の往生は、算用あはせて落付くにあらず、算用は親の彼尊が合はせ給へば、「我等が手許は算用のあはぬなりで、御助け一つを信ずるなり」と、いはれた御法話は、この道理であります。

七、本當に我々は、獨生獨死、獨去獨來の、たゞひとり、さびしく五悪趣の中を流轉するよりほかはない身が、こゝに如來廻向の信心を得て、南無阿彌陀佛の持主となり、現に無量壽の生命を味はひ、一歩々々一日々々に佛果に近づき、やがて大安住の世界へ、一足飛びに往かせていたゞくことを思へば、祖聖が「卽横超截五悪趣」と仰せられた心中は、實に有難く窺はれるのであります。

第二十講　われらの光榮

一切善悪凡夫人
聞信如來弘誓願

一切善悪の凡夫人、
如來の弘誓願を聞信すれば、

佛言廣大勝解者　佛は廣大勝解の者とのたまへり、
是人名分陀利華　是人を分陀利華と名づく。

一、「凡夫人」とは智度論に「妻を愛し、子を愛するを凡といひ、身を惜み命を惜むを夫といふ」とあります、また、一念多念證文には「凡夫といふは、無明煩惱われらがみにみちゝて、欲もおほく、いかりはらだち、そねみねたむこゝろ、おほくひまなくして、臨終の一念にいたるまでとゞまらず、きえず、たえず」と記されてあります、然れば人間として、この世に生れたる者にして、凡夫でないものは一人もないのである、一切の善人も惡人も、貴いものも賤しいものも、等しくこれ凡夫であります。

一切善惡凡夫人

二、『觀無量壽經』に、一切の凡夫の品性の上から、三輩九品と分けてあります、そのうち上中二輩の六品が善凡夫であり、下輩の三品が惡凡夫であります、いま、「一切善惡の凡夫人」とは、これらを指されたのであります。

聞信如來弘誓願

三、而して、この一切の凡夫人は、こと〴〵く、如來の弘誓願を、聞信せなければ、救はるゝことは出來ないのである、「弘誓願」とは、法藏菩薩が、一切善惡の凡夫人を、救はんとお誓ひなされた弘き誓願のことであります、この誓願はすでに十劫の昔に成就して、阿彌陀如來と成られたのである、依つて私達は、この阿彌陀如來の誓願の謂れを聞きひらき、南無阿彌陀佛を心に信ずることによつて、如來の大生命と一つになつて救はれてゆくのであります。

佛言廣大勝解者

四、次に「佛は、廣大勝解の者とのたまひ、此の人を分陀利華と名づけ給ふ」、といはるゝ、この佛は、釋迦佛のことである、大聖釋尊が、大無量壽經に、われら一切の凡夫人が、信心を慶ぶすがたを稱讃して「彼れは、佛の廣大無邊の勝れたる智惠を解了せる大智惠者である」と、仰せられました。

五、「廣大勝解者」とは、廣く大なる智慧を得たる者、といふことである、それ

は、人生の實相を了解り、眞實の信心の智惠を頂いたからである、卽ち、この世の無常轉變を知り、自己の罪惡深重地獄一定の眞相に氣付き、如來より智慧の念佛を得て、前途の闇を晴らして頂いたのであるから、佛は、私達念佛の所有者を、「廣大勝解者」と仰せられるのであります。

六、亡くなつた私の祖父、確方師の所へ、讚岐より一信徒が來りて、御法話を求めて曰ふに、

胸のうちはかはらないか

「私は、永らく、佛法をお聞かせに預かつた仕合せ者でムりますが、お慈悲の有難いことは充分承知してゐながら、この胸にちつとも變つたところがありませぬが、これで往生は如何がでございませうか」

その時、祖父は、大喝一聲して、

「何を阿呆なことを云ふてをるか、變らないで往生が出來るものか、心が變るので往生をさせて頂くのでないか」と、この言葉を聞いた、今の信徒は、顏色をかへて驚き入り、

「それでは、私は、どうしても落ちるより外は御座いませぬ」と、疊にひれ伏して泣き出した、其時、祖父は、

「同行、落ちるよりほかにない、……お前の心は、變つとるぢやないか、落ちるよりほかにないといふ心は、誰に敎へて頂いたか、それが如來の入れ智慧からぢや、變つとる變つとる、同行――、その、落ちるよりほかにない、往けぬ私なればこそ、阿彌陀如來の御本願のお蔭一つで」……と、あとは涙に咽ぶすがたをみて、信徒は、「アヽ、よく分りました、有難うムいました」と、喜んで歸つたことがあります。

智慧とは知識ではない

私達は、如來の入れ智慧に依つて、愚痴罪惡、地獄一定の實相を知らせてもらひ、お慈悲を御慈悲と頂いて、前途の闇を、光と變へさせて頂くのである。

七、こゝに、智慧といふは、常識的な知識を云ふのではない、絕對の佛智を指

すのである、私達の信心は、佛智である、念佛は智恵の念佛である、單なる一片の感情ではない、私達の煩惱のうちにあつて、「利劍卽是彌陀名號、一聲稱念罪皆除」の念佛であつて、三毒五慾に囚はれんとする、あらゆる束縛の業苦を斷ち斬る鋭さをもつ智恵の念佛である、永遠に解くとこの出來ぬ人生最大の謎である死の問題も、このめぐまれた智慧によつて開かるゝのである、親鸞聖人は、

「智慧の念佛うることは、法藏願力のなせるなり、信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし」、「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障おもしとなげかざれ」（和讃）と、讃仰せられました。

山口のお菊

八、長州山口のお菊と云へば稀世の信女である、まだ三十に滿たぬ若い女であるが、現代には誠に泥中の蓮と云つてよい、彼女は娼樓の女中である、肉の汚れた第一の世界に身は住んでも、心は美しい第二の世界におくのであつた、信心お菊と云ふので其娼樓は頗る繁昌した、或年秋の暮の事、恰も縣會の開かれる時のこと、二三の縣會議員をつれた議長某は、その娼樓に登つたのである、酒よ肴よと騷いだ後に、名高い信心お菊を呼べとの所望、詮方なくお菊は蓬々と亂れた髪を梳づるでもなく、襟垢そのまゝの着物で、お座敷へ出るや、議長の某がたづねていふには「お菊、お前は大層佛法を信じて居るそうな」、お菊がいふには「ハイお蔭樣で喜ばせて頂きます」、「ソウカ、それは結構だが、しかし明治大正の世の中となつて居るのに、そんな通用のできない天保錢のやうな佛法を信ずるとは、若い女に似合はないではないか」と揶揄つたのである、ところがお菊の答が實に尊い、「ハイ私は天保錢で結構でございます、貴方方は金貨か銀貨で在つしやいませう、しかし天保錢には、中央に穴が一つあいてをりますから、向ふがハツキリ見へて嬉しふございますが、金貨や銀貨は立派であつても、穴がないから向ふが見へなくて、つまづく事がないとも限りません、ハイ私は天保錢で澤山でございます」と物云ひ澁りながら答へたのである、如何な縣會議長も是には何とも云ふ

べき言葉もなく、並み居る人々と共に襟を正しふして、「お菊全くお前のいふ通りだ、ドーカお前の信心の片端でも聞かせてくれ、そうして明るい未來が見たい」と、昂ぶる頭を下げて、詫び入つたのであつた、それ以來お菊の名はます〳〵高く、信心お菊、天保錢お菊と誰知らない程になつた、お菊は前世の宿業で娼樓の女中となつた、そうして肉の汚れた世界を見ぬいたのであつた、そこへ御念力が忽然とあらはれて、絃歌喧々の中にも、念佛の小聲は絶へなかつたのである、而して彼れは、天保錢のやうな通用の出來ない惡業だらけの心の中央に、一つの信心の穴をあけて本願の大道を、やす〳〵大悲の親様と御一緒にあるいて居たのである。（涙と笑ひ）

香川縣の片山つい氏

九、私はよく香川縣にゆきますが、同地の由佐といふ所に、片山おついさんといふ七十過ぎた婆さんがをる、夫婦共に强信な方であるが、婆さんの信仰が一層冴えてをるやうである、この人はいつも說敎の聽聞なかばで感激が高潮してくると、我胸を叩いて「玉が當つた」と、叫んで喜ぶのが恒である、それは、自分の罪惡深重の胸底に、如來本願の生魂が當る事を喜ぶのである、近在へ和上、學者と云はるゝ、布敎家がくると、三里でも四里でも、八十近い爺さんと一しよに參詣に出かけるが、せつかく詣つても、說敎者に信心のない人に逢ふと、すぐに見拔いてしまつて、「アノ和上さんは、學者ぢやそうなが、氣の毒ながら、玉が死んどるわい、空鐵砲はちつとも當らぬのう」といふ、また本當に信仰のある人に出會ふと「アノお方は、若いけれど、玉が生ききつとるわい」と云ふて喜ぶ、地方の人々にして、此おついさんに依つて入信する者が、おびたゞしいものである、私は香川縣に於ける妙好人として尊敬してをります。

香川縣の穴吹長次氏

一〇、同じ、香川縣の川島に、穴吹長次といふ爺さんがをる、容貌はずゐ分、六かしい顏をしてをるが、しつかり信心の腹の据つた男である、近來、法悅の進むにつけて、穴吹は曰ふ、「高座の上にのぼるお坊さん達には、案外御信心のある

お方のすくないといふことを、知らせてもらふ耳にさせて頂きました、信心の智慧は、人の腹の中までよく分るものですのう」といふ、吾等教家にとつては、頂門の一針である、私はいつも、この爺から嚴しい御意見をうけるが、一度も憍慢爺と思ふたことはない、全く穴吹の云ふ通りだ、僧侶には私はじめとして、まことの信者は尠いのである、御同行の中には、五年も十年も、或ひは喰ふものも喰はずに、御法を求むる事に苦勞した人は多く見受けるが、僧侶には、そんな命懸けに御法を求むる者が幾人あらうかと思へば、實にお耻かしい事である。

蓮如上人は「それ八萬の法藏を知るといふとも、後世をしるを智者とす」と仰せられた、たとひ一文不知の尼入道なりといふとも、後世を知らざる人は愚者とす、一文字を知らぬ人の中に、永遠に生きる道を知つた智恵者が多い。

一一、また觀無量壽經には、「若し念佛する者は、當に知るべし、是の人はこれ人中の分陀利華なり、觀世音菩薩、大勢至菩薩は、その勝友となり給ふ」と、たへさせられました。

是人名分陀利華

「分陀利華」とは、梵語であつて、白い蓮華のことである、印度に於ては、特にこの白蓮華を賞美するのであります、恰も、支那では牡丹、日本では櫻の如きものである、印度に於ては人間の名にまでに蓮華女といふのさへあります、釋尊の一代經の中でも、涅槃經には、佛を蓮華に喩へてあります、法華經では、妙法を蓮華に喩へてある、今、觀無量壽經では、私達、念佛の人を白蓮華に喩へられるのであります。

藝術上の作品

一二、藝術家が、自己の生命を打込んで、美しい女を刻み刻んでゆく中には、自分の刻んだことも打ち忘れて、その姿に見とれてくるさうである、遂には、その女が、生きて動き出してくるやうな尊い感じが湧くそうである。

母が、自分で縫ふた、新しいきものを、我が子に着せた時は、「ア、美しい子」と、ほめずにはゐられなくなるのである。

月が、鏡のやうに、光るのは、月は元より土のかたまりであるが、この土のかたまりの月が、そのまゝ鏡のやうに光るのは全く日の光を受けたからである、如來の光を仰いで生きるものは之に等しい風情である。

倫敦の一少女

或時、倫敦に於て、花卉の品評會が開かれた、其出品中にて、一等賞を受け取つたのは、東部倫敦の貧民窟の、いぶせき小屋に住む顏色蒼白の少女が培養した花であつた、然るに、鑑査に從ふた役員は不審を懷いた、大體、花の培養に缺くべからざるものは光線である、東部倫敦の光線の不充分なる、あの狹い貧民長屋の少女が、如何にして一等賞に當る程の見事の花を培養し得たかである、役員は、この不審を少女に訊したところ、少女の答に「私は、この花を育てあぐるために、常に光のある處、光のある處にと、花の鉢を持ち廻つたのであります」と、少女の念力が、このうす暗い狹屋の中にありながら、光を求めて此のうつくしい花を育成したのである。

大悲倦むことなくして、常に我を照らして、信心の花を開かしめて下さるのであります。

念佛の信者は貪瞋煩惱の中にありながら、如來の佛智に照らされて、其煩惱の泥の濁りに染まぬ白蓮の如く、美しき人であると、お褒め下さるのである、親鸞聖人が、全く「眞の佛弟子」の光榮を喜ばれたのであります。

第二十一講　信順の至難と憍慢の誡め

彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯

彌陀佛の本願念佛は、
邪見憍慢の惡衆生、
信樂を受持すること甚だ以て難し、
難の中の難斯に過ぎたるはなし。

一、「彌陀佛本願念佛」より「難中之難無過斯」までの四句は、彌陀の本願南無阿彌陀佛のみをしへは、容易に信じ難きもので、一往の聽聞や、自分免許ですましてをることは甚だ危險である、邪見憍慢の心があつては、到底まことの信心は得られないことを戒められたのであります。

彌陀本願念佛

二、「彌陀佛の本願念佛」とは、法體成就の名號即ち南無阿彌陀佛のことをいふのであります(口に稱へる稱名ではない)、この本願の念佛即ち南無阿彌陀佛を信ずる者は、どんな者でも救はれて、ほとけにして頂く事が出來るのであるが、もしこちらに一點の「邪見と憍慢」の心があるときは、どうしても信ずることはむつかしいのである。

邪見

三、「邪見」とは、間違つた見解に迷はされてゐる者をいふので、詳しくいへば「因果撥無の見」と申して、善因善果、惡因惡果の道理を辨へず、反つてそれを撥きかへそうとする者のことであります。

例へばわれら人間には、前生も無ければ後生もない、たゞ今生一世のみであつて、善業も惡業もみなこの世限りで絶へてしまふものである、死後の肉體は灰土となつて消えてしまひ、たとひ惡業を造つても未來地獄などと云ふことは怖るゝに足らぬ、また念佛して極樂に生るゝといふやうなことがあるものか等と思ふてゐる輩である、この種の人に限つて人を怖れず佛の御冥見に耻ず、世の中のことはどんなことでも自分の力づくでやれるやうに思ふてゐるのであります。

又近くは、信者顏をして念佛して居る者の中にも、本當に他力本願を信じ、南無阿彌陀佛に救はれてをる人なれば「この機このまゝのお助け」ともいはれやうが、救はれたる自督も體驗もないものが「このまゝ」を「わがまゝ」とはきちがへて、腹の立つまゝ、慾の深きまゝ愚痴をこぼすまゝ、喧嘩するまゝ、他人の惡口を云ひながら、わるいことの仕放題をして、これが「惡人正客」の御本願であると、我慢我情を募る者がありますが、かゝる因果を無視したこの世ながらの地

惡人正機のはきちがひ

獄の大罪人が、どうして本願の名號を信ずることが出來やうか。

まこと如來の本願を信じたければ、先づかゝる邪見の心をひるがへして、我身は罪深き徒ら者であるといふ「正見」にたちかへりて、如來の大慈悲を仰がねば到底救はれるときはないのである。

四、つぎに「憍慢」とは、この世の中で自分一人が一番偉い者のやうに思ひ込んで、聖賢を尊ばず、佛を敬はず、目上の人を輕んじて、常に尊大ぶりて、人を謗り他を見下げてなんとも思ぬは輩であります。

例へば、人道と宗教を一つものゝやうに考へて、吾々は世の中や、他人にはすこしも迷惑をかけたことはない、社會や國家にも充分つくしてをる、また家庭も圓滿にくらしてをる、その上寺や社にも人並に寄附もしてをる、己れはかくも正しく暮してをるのだから、まさか地獄へ行くやうなこともあるまい、佛法を聞くものは、概ね愚夫愚婦のなすべきことであると思ひこんで、佛を拜まず、法をけがし、僧侶を眼下に見おろして、惡口雜言するやうな人々であります。

これらの人はとかく自分の考へがこの世で一番よいものゝやうに妄斷してをるのであるから、他人のことばにして、すこしでも己れの意見に合はぬやうなことがあれば、直ちに之を否定して之を謗り之を斥けて、己が、無智無能を反省することなく、またすこしも耻とも思はないのである。

私はつねに思ふ、自分の出來ることなれば、他人のうへを彼れこれ批評をくだすことも出來やうが、自分で出來もしないことは、一言も他人のうへにくちばしをさしはさむ資格はないはずであると考へてをる、またすこしも自分に研究した覺へもない未經驗のことを、他人の學問や思想の上のことを、兎や角口にすることなどは、全く我思慮の淺薄無能なることを表白するのと同じことではあるまいか、まして後生ほどの一大事に對しては到底人間の思慮分別の及ぶことではないのであります。（拙著『信仰坐談』近代的誤れる三傾向を參照せられたし）

かうした我慢我情の強い人には、如何なるよき教へがあつても、斷じてその耳に入るものではない、從つてかゝる憍慢の人々は到底佛果に到ることは出來ないのである、これを「惡衆生」と申されたのであります。

惡衆生

五、邪見と憍慢は、かくのごとく入信の道には邪魔ものである、この心をひるがへさなければ、決して信心の天地にはいることは出來ないのである、このこゝろを今「信樂受持すること甚だ以て難し」と仰せられたのである、「信樂」とは信心のことで、如來を信ずることゝろであります、「受持」とは、領受憶持といふ意味で、憶念することである、卽ち、本願の念佛を信じ之を己が心中に受け持つといふことは邪見憍慢の人には甚だ以て難しいと仰せられたのであります。

信樂受持甚以難

六、本願念佛の教へは、之を信じたものからいへば、まことに易いみのりであるが、邪見憍慢の人達は之を撥き反したり、わづかばかりの人間の智識やはからひを以て、之を批判して信じやうとするものであるから甚だ難しいことになるのである、大體聖道自力の教の如く、道理成佛のみのりなればまことに信じやすいが、この他力本願の念佛のをしへは、惡人がこのまゝ救はれて成佛するといふ不可思議の妙法であるから人間の智識を以ては到底はかり知ることが出來ないのである、この邊よりいふと他力念佛の會得は困難中の困難事といはねばならぬ、聖人はこの意味を「難の中の難これに過ぎたるはなし」と仰せられたのであります。

難中之難無過斯

七、さればかうした難信の法を、われら凡夫は如何にして信じ奉ることが出來るかといふに、先づ何よりもさきに邪見と憍慢の心をひるがへして素直にへりくだつてたゞ〳〵如來の仰せにお順ひ申すことが肝要であります、他力のみのりを承はるには最も謙遜でなければなりませぬ「實るほど頭のさがる稻穗かな」で、釋尊は「謙敬聞奉行」と教へて、へりくだつて法を聽けば必ず信は得られるものだと仰せられたのである、丁度高い所にある水ならば樋をかけさへすれば必ず低き所へ流れ込むと同樣である、親鸞聖人は和讃に「不退のくらゐすみやかに、

聖人の謙遜の態度

得んと思はん人はみな、恭敬の心に執持して、彌陀の名號稱すべし」と仰せられました、この「恭敬」の心といふも、うや〳〵しくへりくだり、向ふさまをうやまふことであります、卽ち恭敬心を以て本願の念佛をきけば、必ずすくふていたゞくことが出來るのであります。

八、親鸞聖人の御生涯に於ける謙遜の御態度は實に涙ぐましいほどであります

「かたじけなくも、彼の三國の祖師、各〳〵此の一宗を興行す、この故に愚禿すゝむるところ更に私なし」とか「親鸞は弟子一人ももたず、その故は如來の敎法を十方衆生に說き聞かしむるときは、たゞ如來の御代官をまふしつるばかりなり、さらに親鸞めづらしき法を弘めず如來の敎法を我も信じ人にも敎へきかしむるばかりなり」、「さればみな御同朋御同行なりとかしづきて」と仰せられ、すこしも「我」といふものを顯はしたまはず「無慚無愧のこの身にて、まことのこゝろはなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみちたまふ」と、あくまで卑下の語を以て、私達に向ふてくださつてあるのである、かしこくも聖人はいつも濁れる私達と肩を並べてゐて下さるのである、われらはこの聖人の御謙遜なる御人格を仰ぎつゝ、道を求めねばならぬのであります。

香樹院と高慢婆

九、香樹院和上が、江州の或る寺で御法話遊ばした時、一人の老婆が一座からさし出でゝいかにも高慢顏をしてお領解を述べあげたことがあつた、其時、和上は、顏をしかめて「ばゝ、おれはお前の顏をみるのもいやぢや」と仰せられた、婆は和上のこの御一言に恐れ入つて、人前をわるそうな顏をして、其場を立ち退かうとした、その時、和上は「婆さん、待ちなさい」とよびかへして、重ねての仰せに「婆さん、ようく聞けよ、おればかりが嫌ふのではない、そんな、我慢の鼻が高ふては、十方の諸佛菩薩もみなおきらひぢや、諸佛菩薩にさへ忌みきらはれた者を、ことに憐と思召して、その我慢の心の和らぐまで照らして救ふて下さるのが、阿彌陀樣の御光明ぢやぞよ」と、云ふて聞かされた、婆は只々有難さに

感泣して涙ながらに改悔して歸つたといふ。

一〇、この香樹院の御法話を讀んで、この怖ろしき痛棒はたゞに江州の婆丈へのおことばとは思へない、知らず〳〵に憍慢の巔に上らんとしてをる私一人へお誡めであると思はざるを得ない、私自身が、他人の邪見や憍慢の態度の見へる時は、早その時に我が身が邪見憍慢の心の窓から見てをる時なのである、どこまで迷倒の凡夫であらうか、頭のあがる奴ではない、邪見憍慢の惡衆生とは全く私のことである、こんなものをお救ひ下さるといふことは、ほんとうにお骨の折れることであらう「難中の難これにすぎたるはなし」とのお言葉は全くその通りであると肯づかれます、この難化難治の惡衆生を、大悲大願の親さまは、どうしても、助けずばおかぬの思召を以て、久遠劫來念ひつめて下されたのである、この御念力がどうして徹らぬといふことがあらうか、この邪見な奴が助けられ、この憍慢な奴が攝め取られて、たゞ念佛せずにゐられぬのは、全く御光明のお照らし

と、御名號のおはからひによつてゞあると仰がずにゐられませぬ。

不良少年を預る

一一、私が嘗て、酒のたくさんできるS町から、兩親さへも持てあまされたといふ、稍々不良性をおびた少年をあづかつてをつたことがある、丁度二ヶ年ほど私の傍において敎養し、いよ〳〵これなれば、まつすぐな人間になつてくれたと思ひ、二年半目に親里へ歸すことにした、私はまじめになつて歸つてゆく、まる〳〵ふとつた少年のうしろ姿をみて、人知れずうれし涙にむせんだのであつた。

それから子供を歸して二日目の午後、私はA市へ行く積りで、停車場についてみると、停車場前の交番へ一人の少年が引つ込れてゐるといふので人が山の樣に集まつてゐる、私も近寄つてガラス越しに交番の中をのぞき込んでみると、二日前に親里へ歸つたと思ふてゐる少年が夫である、玩具店で萬引をしたといふのである、それから警官に事情を述べて、その子供をもろうて我が家へ歸つて來た。

私は、つく〴〵子供の顏をみてゐると、あまりになさけなくて、泣けて〳〵し

かたがない、思はず「貴様は、また、どうしてそんなことをしたんだ」といふた其刹那に「あゝこの子供のすがたは、自分の姿ではないか、大悲の如來さまは、私の事を、ぢつとみて、毎日々々こういふて泣いてゐて下さるのである」と、思ふと涙が出て〳〵しかたがない、子供も涙ぐんで頭を下げて泣いてゐる、二人の涙は別々であるが、私のやうなものが、まつすぐの人間に、つくりかへやうとするこの憍慢の奴の爲に、大悲の親様が永の間涙をしぼつてゐて下さるのである、

「Hさん御佛前に行つてあやまらう、二人とも惡いんだ、頭の上る奴ぢやない」子供と二人で如來さまの御前で夕方まで念佛したことがあります、ほんとうに、私達は、大慈大悲の親さまがなくばたすかる奴ではありませぬ。

一二、殊に私の如きものはとかく憍慢に上り安いから、信樂を受持することもまた難かしいのである、まことに慚愧に堪へませぬ、香樹院様が、

「御法義には、「知る分齊」と、「好む分齊」と、「樂む分齊」とがある、僧侶は好む分齊となつたのが極上等である、なか〳〵樂む分齊には成られぬ、これは大事なことぢやと骨折る所が好むのである、また愚かな尼婆々などが、嬉しうてならぬといふやうに成られたのが樂しむ所である、この分齊には、僧侶などが學問をしたゞけでは成られぬ、彼の明遍僧都が、貧家愚僧に生れて、心よく往生したい、と申されたのは、好むといふ所までは行けども、まだ樂しむ所へは至られぬとの思召よりの願心である、信心獲得に就ては、學問した者は、愚者よりも百倍の骨を折らねばならぬ」と、實に穿つた教誨であります、いま迄は、どうしても分らなかつた事が、二つ三つ胸に會得が出來ると、早や卒業したやうな氣になつたり、骨折つて聽聞して、師匠や友達になほしてもらうて、もう間違はぬ處へこぎつけたやうに心得て、安つぽい御信心をきめこんだり、祖師や蓮師のみをしへを、安つぽい頭の中へのみ込ませて固く握つて、互ひに、我慢を募りて、輕卒にも、他人の信仰を批評したり、同行の安心を裁いたりなどする、これは僧侶に限らず、

物知り同行、所謂教義の生嚙りの學者知識階級に屬する者に多いのである、兎角「是でよい」と思ふ、慘めな穴へ落ちて出かねる者が少くないから、再々に信心の溝を浚へなくてはならぬ、即ち「心得た」と思ふた溜り水を掃き流して、新しい信の泉を汲まなくてはならぬ。

知る分齊

一三、近來は「知る分齊」、「學ぶ分齊」の人は澤山に增へた樣であるが、好む分齊、樂む分齊の人は誠に尠い樣である、黑板の前に立つて、宗教を科學的に組織的に書き並べて之を講義する、また聽く方も、手帖に一々之を書き記して研究をやつてをる、これらは一種閑人の道樂で、全く聖道門の教理行果の形式である、かゝる分齊には宗教のうま味は分るものではありませぬ。

好む分齊

次に「好む分齊」とは、渴して水を求むる如く、自己の生命の大問題である一大事であると、骨折つて聞き、憍慢の我心を引き破り〳〵して進んで行く、世の眞面目なる求道者の多くのそれである、こゝに宗教の尊さも味はれ、自己の生活も教の光を以て洗はれてゆくのである、ところが、時々自己の實際生活と信念とが別物のやうに成り易いもので、如來の大愛の力が私の全身を動かして下され、法の水が私の血にも肉にも成つて、理窟も、道理もいつてゐられない、「なにごとのおはしますかは知らねども、たゞ有難さに涙こぼるゝ」の心持、たゞ南無阿彌陀佛〳〵ばかりで、ほれ〴〵と歡ばせて頂く生活、即ち「樂む分齊」にはなかなか成りにくいものである、是は加藤さんのお話で承はつたのであるが

樂む分齊

芭蕉翁の俳句生活

一四、芭蕉翁が人に招かれて、一夜、俳句の座敷へ出た事があつたが、主人は丁重に饗して呉れたところが、燭臺に立てゝあつた蠟燭の心が長ふなつたので、主人は小僧を呼んで其心を切らせた、すると、心を切る時に、深く切り過ぎたので、燈が消えてしまうた、主人は非常に小僧を叱り付けて、其頭を毆つた、やゝあつて、芭蕉翁は座を辭して、歸らうとすると、主人は頻りに此をとゞめて「是非今夜はお急ぎでなくは、御遊興を願ひ度いのでムいますが」と、切に望んで

やまなかつた、其時、翁は申されたさうである、「俳句を作り、歌を詠むといふことは、たゞ句を吐くことではない、生活が歌であらねばならぬ、燈が消えて腹が立つやうな御座敷では、兎ても優雅な一夜を樂しむことはできぬ、アレ、アノやうに、美しい月が山の端に現はれたではないか、燈が消えたおかげで、よい月見が出來る、燈が消えれば、消えたところに感興があるやうでなくては、俳句の座敷とは申されまい」と懇ろに其の人の非を誡められたといふことである、こゝに、家の主人と芭蕉翁との違ひを見ることができる、主人は之を好む人である、芭蕉翁は之を樂しむ人である、主人には俳句と生活とが別になつてゐる、翁にありては、生活が全身的に詩であり歌であります。

「之を知る者は、之を好むに加かず、之を好む者は、之を樂しむ者に加かず」と、古人も申された如く、常に憍慢の心を引き破り引き破つて如來大悲の本願をあふぎ、常に新しき、法の泉を汲まねばなりませぬ。

この正信偈六十行百二十句全部を便宜上二段に分けまして、始めの「歸命無量壽如來」より、今回の「難中之難無過斯」までを一段として、これを「依經分」と申します、即ち親鸞聖人が、大無量壽經を拜讀せられて、それを體驗せられたる要領を讃仰せられたものであります、次の第二段「印度西天之論家」より終りの「唯可信斯高僧說」までを「依釋分」と申して、從來述べ來りし、釋尊出世の本懷たる、阿彌陀如來の本願が、濁世の惡機に相應したるみ教へなることを、三國の七高僧が、各〳〵の論釋の中に明示せられてある、之に依つて讀ませられたものが、以下の御文であります。

第二十二講　三國の七高祖と其指導

印度西天之論家

印度西天の論家、

中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機

中夏日域の高僧、
大聖興世の正意をあらはし、
如來の本誓機に應ずることを明せり。

一、親鸞聖人が、念佛を稱へて如來に助けられてお淨土へ往かれる道行に、七人の先達をゐらばれました、それは印度に在つては龍樹、天親の二菩薩と、支那に於ては曇鸞、道綽、善導の三高僧と、日本にあつては源信、源空の二上人であります。

これらの七高僧は、おの〳〵お生れになつた土地も時も境遇も、また地位も學問も異つてをらるゝのでありますが、その根本精神は皆同一であらせられるのであります、同じく阿彌陀佛を信じ、ひとしくお念佛を唱へ、何れも彌陀の淨土を願はれた點に於て、凡て一致してをらるゝのである、こゝろの問題には、處も時も境遇もありません、たとひ時は百年千年隔つてをつても、處は印度、支那、日本と離れてをつても、身分の高い低いのちがひがあつても、ひとつ親のあたゝかい御心にふれるうへに於ては、みんな親しい同胞であり友であります、聖人はこんな理由でたくさんの聖賢の中よりこの七人を擇び出されたのである、この意味から云へは聖人は、たよりすくない獨り旅のさびしいお方ではなかつた、つねにこの七高僧を心の指導者として本願の大道を賑やかに歩まれたのであります。

二、しかし、印度、支那、日本に渉つて、他力本願の教を傳へられた高僧は、この七高僧以外にも澤山にゐらせられるのに係はらず、聖人はたゞこの七人を選んで、たましいの祖師と定められたのは、一體、どういふわけであらう。

即ち、印度に於ては、目犍連、馬鳴、無着、等の諸菩薩あり、支那においては慧遠、菩提流支、淨影、天台、嘉祥、慈恩、法照、少康等の諸師があり、日本に於ても、智光、傳教、慈覺、空也、覺鑁、等の念佛者もゐられる、これらの諸師

七祖選定の理由

をさしおかれて、特に前記の七祖を選ばれしは、どういふ理由であらうか、之に就て、古來の學者は次の三つの理由を擧げてあります。

一に著書の有無である、其信念なり教義を發表せられた、書物に著はされてあるお方でなければならぬ、でないと、其人の信念も主張も明らかでないから。

二に教義の發揮である、たとひ著書があつても、その内容が、著者獨特の新しい主張があつて、他力本願の教義を特に發揮してをられるお方でなければならぬ。

三に信念と行爲の一致である、その裡に燃ゆる信念と、表の行爲が一致してをられるお方でなければならぬ、裡は他力信念に安住してをりながら、表に聖道門的の生活をしてをる人は祖師として數へることは出來ぬ。

以上の、三種を標準として、三國の高僧の中より、特にこの七祖を選ばれたのであります。

印度西天之論家

三、そこで、「印度西天の論家」とは、印度の國にお出ましなされた龍樹菩薩、天親菩薩のことをいふのでありまして「西天」とは印度が支那や日本の西方に當つてをる故に西天と云はれたのであり「論家」とは、論をつくられた御方といふことであります、大體佛教に於ては釋尊みづからが說かれたものを「經」といひ、菩薩方の造られたものを「論」といひ、祖師方の書かれたものを「釋」と申してをります、そこでいまは大乘小乘に就いて千部の論を書きあげられたといふ龍樹、天親の二菩薩を指して論家と仰せられたのであります。

中夏日域之高僧

四、「中夏日域の高僧」とは、「中夏」は支那のことであり「日域」とは日の出づる國卽ち我が日本のことである、「高僧」とは、學深く德高き僧といふことで、こゝでは支那の曇鸞、道綽、善導の三大師と、我が邦の源信、源空の二上人のことをいはれたのであります。

顯大聖興世正意

五、「大聖興世の正意を顯はし」とある「大聖」とは大いなる聖者といふことで

釋迦如來のことである、「興世」とは釋尊が、この世に出現せられたことである、「正意」とは正しき本意といふことであつて、すなはち釋迦如來が、この世へお出ましなされた御本意は、全く彌陀如來の他力本願の謂れを說き、惡人救濟の道を敎へんとの思召より他はなかつたといふことを、これらの七高僧に依つて明らかにあらはしてくだされたのであります。

六、更にくわしく申せば、

印度に於ては、

一、龍樹菩薩は、『易行品』、『十二禮』をあらはして、難易二道の決判や、現生不退の敎義を明らかにし、自らは念佛して西方に往生せられました。

二、天親菩薩は、『淨土論』を著して、そのなかに、一心歸命、五念五功德等の敎義を說きて、自らは、盡十方無碍光如來に歸命して、安樂國に生れんことを願はれました。

支那に於ては、

三、曇鸞大師は『淨土論註』、『讃阿彌陀佛偈』を著はして、自力他力、往還二廻向、如實不如實の敎義を明らかにして、自らは、西方阿彌陀佛に南無歸命して安樂國に往生せられました。

四、道綽禪師は『安樂集』を著して、その中に、聖道淨土の二門を敎判して、自ら念佛して淨土に向はれました。

五、善導大師は、『觀經四帖疏』、『往生禮讃』、『法事讃』、『般舟讃』、『觀念法門』の五部九卷の書を著はして、頓漸二敎、正雜二行の敎義を述べて、自ら念佛して往生せられました。

日本に於ては、

六、源信和尙は、『往生要集』を著はして、專雜の得失、報化二土の區別を明らかにして、自ら念佛して西方淨土に往生せられました。

七、源空上人は、『選擇本願念佛集』を著はして、信疑決判して、念佛を專らお勸め下さいました。

かやうに、窺へば、三國の高僧のうち、特に七祖を擇ばれた、親鸞聖人の思召がいよ〳〵明らかになつてまゐりました。

明如來本誓應機

七、次に「如來の本誓、機に應ずることを明す」とあるこの「如來」は阿彌陀如來のことである、「本誓」とは、根本の誓願といふことで阿彌陀如來の惡人救濟の第十八願のことであります、「機に應ずることを明かす」とは、この第十八願卽ち念佛往生の本願こそは、私達凡夫の根機に相應せるみのりである事を、この七高僧の御力によつて顯はされたのである事を祖聖は喜ばれたのであります。

八、仍て、親鸞聖人は、

「三國の祖師、各〳〵この一宗を興行す、この故に愚禿すゝむるところ、さらに私なし」とも、また、

「こゝに愚禿、釋の親鸞、喜ばしきかな、西蕃月支の聖典、東夏日域の師釋に遇ひ難くして今遇ふことを得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり、眞宗の敎行證を敬信し、特に如來の恩德の深きことを知ぬ」(敎行信證總序)とも、仰せられて、他力本願の敎は、決して親鸞一人の私見ではない、親鸞の信ずる信心は、我一人の信心ではなく、その源は遠く阿彌陀如來の御胸より流れ出で、代々の高僧偉人に傳はり來つたものである、親鸞聖人の信仰はそのまゝ、七祖の信仰である、七祖の信心は、そのまゝ釋尊の信心であり、釋尊の信心はそのまゝ阿彌陀佛の招喚の勅命である、歸するところ、すこしも自力のはからひをさしはさまぬ、我慢我情のなき、無我の信仰でなくてはならぬことを、この七祖相承の上に、聖人自らの、全くはからひなき、無我の信心を示されたものであります。

相承

法霖師と法主

依つて、親鸞聖人の敎を奉ずる者は、この「相承」といふことを非常に重んずるのであります、本願寺の能化に法霖といふ大德がゐられた、時の本願寺法主が

病氣にて、今か〳〵といふ大病の時に到つて、九條家より來られた裏方が、夫の大病を治さん爲に、九條家に請ふて、祈禱をして貰ひたるに、忽ち病氣平癒したるをよろこぶを聞いて、法霖は非常に怒り、現世祈禱は親鸞聖人の宗敎に於ては、大の禁物である、祖師の相承に背くものである、本願寺の内庭にあつて、是の如き事ありては、宗門を滅亡するのと同一である、宜しく自ら割腹して、宗門の辱しめを雪がれたしと諫言を呈して、終に法主をして死に至らしめた事は、本願寺の歴史に有名なるものである、如何に、「相承」の大切なるかゞ、これでも察せらるゝわけであります。

九、私は思ふ、この世界中の十八億萬人のうちで、本當に私の衷心から親しんでゆける人が幾人あるであらうか、眞實に私と共に泣き、私と共に笑ふてくれる友が何人あらうか――と思へば實にさびしいこゝちが感じられる、私はたしかなる先達がほしい、身も心もうち込んでゆける友がほしいのである、まことの友をもつた人は心強いことであらう、聖人がたくさんの聖者の中から、この七人を擇び出されたことは、ほんとうにたのもしいことであります。

思ふにこの七人の高僧は、第一祖の龍樹菩薩より第七祖の源空上人まで、前後相隔たること實に一千餘年であります、この時と所の異つた聖賢が一糸亂れず、同一の彌陀如來の本願を信じ、同一の佛心の靈動にふれ、同一に念佛を稱へられたといふことは云ひやうのない靈感にうたれる次第であります。

一〇、今私達、罪惡虛妄の身ながら念佛せずにゐられない、このやむにやまれないお念佛は果して何處から來たのであらうか、もとより親鸞聖人のお口から傳はつてきたものには違ひないが、その親鸞さまのお念佛は何處から流れてきたのであらうか、それは源空上人のお口からである、然らば源空さまのお念佛は源信和尚からである、源信さまは支那の善導大師からである、善導さまは道綽大師からである、道綽さまは曇鸞大師からである、曇鸞さまは印度の天親菩薩からであ

る、天親さまは龍樹菩薩からである、龍樹菩薩は釋迦如來からである、釋尊の思召は阿彌陀如來の御念力からであつた、あゝ奥には奥がある、底には底がある、私の稱へる、この一聲の念佛、この一念の信心、その源がすべて阿彌陀佛の御念力から動かされてをるのであります。

胸から胸へ

一一、この念佛こそは彌陀如來のお胸より釋尊のお胸へ、釋尊より龍樹へ、天親へ、曇鸞へ、道綽へ、善導へ、源信へ、源空へ、一器の水を一器にうつす如く胸から胸へ心から心へ、口から口へと流れて來て我が親鸞聖人のお心に入つて、いまそれが私の心に傳はつてきたのである、勿體なくもうれしいことであります、私達はこの汚れきつた心のうちに温かき念佛を味ひ、龍樹と語り天親と悦び、曇鸞と泣き、道綽と笑ひ、善導に正され源信に教へられ、源空と抱き合ひ、祖聖親鸞に導かれて、叱られたり賞められたりしながら、静かに安らかにお淨土へまで御同行申しあげるのである、いひやうのない仕合せものであります、これより、この七高僧の御一人々々に就て、みおしゑを受けるのであります。

第二十三講　第一祖龍樹大士の人格と信念

釋迦如來楞伽仙　釋迦如來楞伽山にして、
爲衆告命南天竺　衆のために告命したまはく、
龍樹大士出於世　南天竺に龍樹大士世に出て、
悉能摧破有無見　悉くよく有無の見を摧破せん、
宣說大乘無上法　大乘無上の法を宣說し、
證歡喜地生安樂　歡喜地を證して安樂に生ぜんと。

釋尊の豫言

一、むかし釋迦如來が、印度の南方にあたる楞伽といふ山で、楞迦經をお說き

なされたことがあつた、その時集まれる衆くの人々に對して、告げて命ぜらるゝ樣、

「我が滅後五百年の後に、南天竺に龍樹といふ大士がこの世に生れてくるであらう、而してこの大士は能く我が敎に通達して、其妙理を證り、世人の中に、我が敎を充分に知らずして、凡て人間は幾度生れ更りても人間であるといふ如き有の見に墮したり、または其反對に、人間がひとたび死せば、恰も燈火の滅するやうに、何等の跡方もなく消えてゆくやうに考へる無の見におちたりなどして、尊き眞理の大道に出づる事なく、たゞ徒らに邪說偏見に迷へる者を、龍樹が出でゝ、悉く之を打ち摧き、年來の迷へる者の夢を醒ますであらう、而して彼は、かくの如く諸人の邪見を正すのみならず、自らは大乘無上の法である南無阿彌陀佛の眞理を信じ、多くの人々をして彌陀の淨土に導き、且その身は、自力の修行によつて、歡喜地といふ菩薩の位までも證りながらこの位も修行も打捨てゝ、絕對他力の念佛に歸し、而してうるはしく安養淨土に往生を遂ぐるであらう」と、豫言せられたのであります。

二、然るに、果せるかな佛滅後五百年の後に、この豫言通に菩薩は、南天竺に出世あらせられました、わが親鸞聖人は、この釋迦如來の豫言にふかく感ぜられ、この楞伽經の物語りをそのまゝ擧げて、いま正信偈に「釋迦如來楞伽山にして、衆の爲に告命したまはく、南天竺に龍樹大士世に出でゝ、悉く能く有無の見を摧破し、大乘無上の法を宣說して、歡喜地を證して、安樂に生ぜん」と、大士の高德を稱讃せられたのであります、卽ち釋尊の御心が五百年後の龍樹の御心に通じ、龍樹の御心が五百年前の釋尊の御心に觸れてゐたこの間の宗敎的信心の妙味は、なんともいへぬ尊とさをおぼゆるのであります。

釋迦如來楞伽山

三、「釋迦如來楞伽山」といふは、釋迦如來とは、くわしく言へば、釋迦牟尼如來といふことである、釋迦牟尼とは、梵語であつて、支那語に譯すと、能仁寂默

といふことになります、能仁とは慈悲、寂默とは智惠のことである、卽ち釋迦牟尼如來とは、慈悲と智惠との二德を圓滿に具へたまふ如來といふことであります、この釋迦如來が楞伽山に於て、楞伽經を說かれたのである。

爲衆告命南天笠

四、「衆の爲に告命したまはく」とは、釋迦如來が、楞伽山に集まつてをる大慧菩薩等の多くの聽衆に向つて告げられたのである、その楞伽經の懸記(未來記)の文といふは、

「我乘內證智は妄覺の非境界なり、如來滅世の後、誰れか持ちて我が爲に說かん、未來當に人あるべし、南天の國中に於て、大德の比丘あらん、龍樹菩薩と名づけむ、能く有無の見を破りて、人の爲に我乘大乘無上の法を說き、初歡喜地に住して、安樂國に往生せん」と、仰せられてあります。

龍樹大士出於世

五、「龍樹」とは、出家して龍宮に入り、大乘の經典を見て菩薩の位を成ぜられたので龍樹と號するので、原名は、那伽閼剌樹那と申します、「大士」とは、大きな心をもつた大丈夫の士といふ意味である、「出於世」とは、この世に出生せられたことであります。

悉能摧破有無見

六、「悉く能く、有無の見を摧破せん」といふは、當時の印度にあつては、宗教上の思想が麻の如く亂れ、其主義が六十二見、九十五種といふ多數に別れ、各〻相爭ふてをつたのであります、いまこれらの主張を大別すると、有の見、無の見の二つになります、

有の見

その有の見といふは、人間や畜生には各〻凝り固まつた一つの靈魂といふものが有ると考へて、人はいつも人に生れ、犬は常に犬に生れるなど思ふてをる外道である、

無の見

また之に反し、無の見といふは、あくまで生命を否定して、人間にも畜生にも、死後などは有るものではない、恰も人の死するは燈火の消えたやうに、凡てが無に歸するものであるといふ見解である、これらは皆佛法の因果の敎理を知らぬ邪見な考へ方である、そこで、龍樹は決然として振ひ立たれて、これらの妄見を打破り、凡ての萬象は、有でもなく無でもなく無常であ

宣説大乘無上法

る、因縁によりて生じ、因縁によりて滅するものであるといふ、有無の二見に偏せない中道實相の妙旨である大乘無上の法を説き弘められたのであります。

證歡喜地生安樂

七、「歡喜地を證して安樂に生ぜん」とは「歡喜地」といふは、菩薩の位であります、菩薩の位には五十一段あつて、その歡喜地とは四十一段目であつて、必ず成佛の見込みのついた位をいふのである、龍樹はこの位にまで昇られたお方であつたが、それにも滿足せられずして、念佛門に歸して西方淨土の往生を願はれたのであります、「安樂國とは、身に危險なきを安と云ひ、心に憂惱なきを樂といふ」即ち阿彌陀佛の御國を安樂國といふのであります。

龍樹の少年時代

八、龍樹菩薩の傳記を讀むと、幼少の頃から非常に才智が勝れ、一度聞いたことは忘れないといふ聰明さであつた、當時南天竺の神童として、世の名望を一身に集めてゐられたのである、然し少年時代の稱讃はやがて青年時代に入りて遂に墮落の淵に導いたのである、龍樹には最も親しい三人の友があつた、何れ劣らぬ

隱身術を學ぶ

明敏な人達であつたが、若き血の燃ゆる親友達はいつのまにか酒にひたり色に耽る身となつた、當時南天竺の宮城にはたくさんの美しい女性が集まつてをつた、龍樹は三人の友と共に、この王城に入りて、それらの美女を犯し、思ふまゝに性慾の滿足を遂げやうといふ、怪しからぬ望みをおこしたのであります、然し王城に入つてこれらの人々に近づくことは容易なことではない、そこで龍樹は友と共に仙人の所へ往つて、隱身の法即ち我身をかくす忍術をまなばれ、それでもつて快樂に耽り、ほしいまゝに肉慾を滿足してをつたのであります。

然しこんなことがいつまでも發見せずにすむものではない、宮中の女は次から次へと身持になつたものであるから、遂に王が不審をいだき、これはきつと隱身の法を利用して忍んでくる者があるに相違ないといふことになり、或夜城の入口に灰を撒いて、その足跡を探らんとしたのである、龍樹等はそれらの計略のあることをも知らずして、いつものやうに友と共に忍び込んで來たのである、護衛の

者がこのたしかなる足跡を見て、四五十人の武士が一時に宮中に飛びこんで四方八方斬りまくつたので、またゝく間に親友の三人は斬り殺されてしまつたのである、然るに龍樹はたゞ一人、敏くも、印度には古くより、王より七尺離れてゞないと劍を拔くことのならぬといふ法律のあることを知つて、劍を拔いた武士がくると、直に王の身體に寄り添ふてゐられたものであるから、幸ひにこの難を逃れることが出來たのであります。

友の横死と性慾苦とが緣となつて出家す

九、かくの如き友の横死を眼前にみられた龍樹は、どうしてヂッとしてゐられやう、こゝに於て飜然として悟るところがあつた、人間は慾望の趣くまゝにまかせてゆけば、最後はいつも行きつまつてしまふものである、人間の慾ほど怖ろしいものはない、慾はまさしく苦の本である、墮落の泉である、德を破り身を危くするものは全く情慾が源である、自分を危くするものは自分であつた、我は是よりこれらの慾望に囚はれないで、永遠に眞實の道を歩まねばならぬ、こゝにめざめたる龍樹は遂に家を捨てゝ、さびしい心を抱きながら、遠く旅路に出られたのであります。

龍宮に入る

一〇、かくして龍樹は、初めに小乘教を研究せられたのであつたが、得るところなく、遂に龍宮に入つて華嚴經を拜讀してはじめて眞實の意義を悟られたのであつた、龍宮といふは、餘り人の行かない離れ島のことであらう、かくて龍樹は根氣にまかせて大乘の經典をしらべ千部に達する聖典までも著はし、盛んに大乘佛教を宣傳し、當時の亂れた佛教思想を一掃し、凡ての俗說を摧き、因襲の偏見を打ち破られたのであります、而して我が身は自力の修行に依つて、歡喜地の菩薩の位にまで昇りながら、それらの地位には目もくれず、たゞまつすぐに彌陀如來の本願を信じ、專ら念佛を弘められたのであります、この猛烈なる破邪顯正の傳道に無暴なる異教徒のうらみをうけられ、菩薩は遂に南印度の「コサラ」といふ所で迫害をうけられて、この世をお果てになつたのであります。

一、龍樹菩薩の信念は實に金剛の如く堅かつた、戰國のやうに亂れた宗教界思想界のたゞ中にあつて、恐れず怯まず、南無阿彌陀佛と共に奮鬪されて、遂に法敵の爲めに一身を捨てられた尊い大精神、大信念こそ、今日の私達の大に學ばねばならぬことであると思ひます、我が親鸞聖人が、七高僧の第一祖にこの龍樹菩薩を擇ばれたことは、まことに意味深いことであるとおもひます。

第二十四講　難易二道と現生不退

顯示難行陸路苦　難行の陸路苦しきことを顯示して、
信樂易行水道樂　易行の水道樂しきことを信樂せしむ。
憶念彌陀佛本願　彌陀佛の本願を憶念すれば、
自然卽時入必定　自然に卽のとき必定にいる、
唯能常稱如來號　唯よく常に如來のみ號を稱して、
應報大悲弘誓恩　應に大悲弘誓の恩を報ず可しと言へり。

顯示難行陸路苦

一、龍樹菩薩は自分が實際に佛の道を求められた體驗の上から、釋尊一代の佛教を二つに分けて「難行道」と「易行道」とに決判せられました、難行道とは困難なる修行といふ意味で、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧等の六度萬行を修して歷劫の後、此世に於て佛に成らうとする聖道自力の法をいふのであつて、

難行道

易行道

それは恰も山を越え坂を登つて陸路を歩行するが如きものである、次ぎに易行道とは、平易なる行といふ意味で、彌陀の本願を信じ、念佛を稱へて淨土に往生する絕對他力の法を指すのであります、之は恰も水上を船にて渡して貰ひ、凡てを船人に任せてゆくが如き樂しきものであると喩へられたのであります。

人間は人間である

二、今親鸞聖人の御意を體して窺へば、難行道とは、人間が佛になるといふ事

は絶對に不可能の事である、人間の心は底の底までたゞれてゐる、此人間がどんなに力んでみても人間である、人間が聖者の様な悟つた顔をしてみたつて人間は矢張人間である、凡ての人間の心の中に這入つてみよ、どんな人間にだつて過失もあればつまづきもある、皆寂しい思ひをしてをるのではないか、いかに力んだつて勵んだつて人間は人間以上には出られない、犬がいかに力んでも犬である、馬がどんなに賢そうにしてみたつて馬以上には出られないのである、然し乍ら人間が人間として墮落しない道は隨分教へられてきた、「ものの命を奪つてはならぬ、盜み心を起してはならぬ、邪まな婬事をしてはならぬ、偽つてはならぬ、貪つてはならぬ」と、成程夫はそうかも知れぬが、果して人間にそんな事が出來るであらうか、親鸞聖人は、最も正直に「惡性更に止め難し、心は蛇蝎の如くなり、修善も雜毒なる故に、虚假の行とぞ名づけたり」、「外儀の姿は人毎に、賢善精進現ぜしむ、貪瞋邪偽多き故、奸詐もゝはし身にてり」と、人間の心のありのまゝを卒直に告白せられました、人間はどこまでも人間である、惡い性質は更に止めがたく、心は蛇蝎の如くである、此人間が少しばかりの善を修めても、それには色々の毒を含んでをる、雜毒の善である虚偽の行である、外の姿はいかにも賢人や善人の様に見せかけてをつても、内實はそれと眞反對で、貪、瞋、邪偽の心ばかりが身にみちてをるではないかと歎かれたのであります。

俎上の鰻

三、誰れかの話に、ひろ〳〵とした川の底に住んでをつた鰻が、慾のためにふと餌を口にした、その餌が咽喉を通るか通らぬうちに、とう〳〵釣り上げられてしまふた、まもなく鰻は俎板の上にのせられて、頭にはしつかりと釘が打ちこまれてゐる、どうかして逃げやうと、あせればあせる程頭が痛む、はねてみてもだめである、ぐる〳〵まわつてみても駄目である、せい一ぱいのところで、俎板の左の方にあつたしつぽが、右の方にゆく位のもので、頭は依然として、釘づけにせられて居る、かうしてをるあひだに、上の方から、光つた庖丁を持つた料理人

が、あざ笑ふやうに、のぞきこんでをる、もがいてもあせつても、鰻は背中を割かれて、一寸きざみに、きざまれてゆくのである。

鰻は私である、俎板はこの人間の世界である、餌は、貪慾、瞋恚、愚痴の本能である、釘は業である、料理人は死である、と、いかにも皮肉であるが、全く私達の現實であります。

四、然るに此淺間しい汚れきつた人間が一寸でも佛様をお慕ひまうしたり、一歩でも如來の淨土をあこがれたりする事は、それは決して人間の心から發起つた心ではない、それは全く如來のやるせない本願力、たゞ一途に救ふてやりたい、助けてやりたいの御念力が、人間の心の中に顯はれて如來を憶はずにをれなくなつたのである、私達が心から如來を憶ふ様になつたのは、いつもかも憶ひづめ(憶念)にしてをつて下さる如來の御心から憶はせて下さるのである。

五、仍て人間がどんなに修行をしてみたつて獨の力で佛になる事は難行道である、ゆゑに永き昔より盡きぬ後まで泣きつゞけ悶えつゞけねばならぬ私達人間の心の奥深い所にきて、私達を憶ひづめ念じづめにしてゐて下さる如來の大御心にめざめて、此本願の御心に凡てを任して生きる事が最も安い易行道である、これ一つが私達人間を眞實に生かし淨土へ迄連れて往つて下さる大道である、親鸞聖人は此味ひを今「難行の陸路苦しき事を顯示して、易行の水道の樂しき事を信樂せしむ、彌陀佛の本願を憶念すれば、自然に卽の時必定に入る」と仰せられたのである。

憶念彌陀佛本願

六、「彌陀佛の本願を憶念すれば」とは、彌陀の本願を信ずる事である、これが如來に救はれる唯一の道であります、「憶念」とは如來が絶へず、私達を助けねば置かぬ救はねば置かぬの御心をもつて、私達の上に顯はれて下さつてあるから、私達はその大慈悲の御心を素直に承けいれるばかりである事をいふのであります、卽ち猫の心を以て人間の心を思ひ計る事は六かしい如く、人間の心を以て阿

彌陀佛の御心を知る事は到底出來ない事である、そこで私達が阿彌陀佛を信ずる（憶念）といふ事は阿彌陀佛の憶ひづめの御心（本願）を、其まゝ私達の心の上にめざめる事である、これを「彌陀佛の本願を憶念する」といふのであります。

夢中で我子の名をよぶ

七、私と同年であつたS君が、腸チブスにかゝつて、或る田舍の村の避病院に入院して、急に病勢がつのつたから是非遇ひに來てくれといふ電報が、其奥さんの名で知らせて來た、すぐ夜の汽車で駈けつけて往つてみると、注射ばかりで五日間程命をつないでゐるといふ、そばでみて居つて今にも息が切れそうである、高い熱に浮されながら、夢中で「光雄、光雄、光雄」と、我子の名を呼んでをる、稍あつて、目を醒まし私の顔をみるなり「アゝ會ひたかつた、僕は何も云ひのこす事はないが、たゞ、どうぞ光雄が一人前の者になつてくれゝばよいがと、そればつかりが憶はれてならぬ、君――「どうか光雄をたのむ」、これだけが賴みたかつたのだ」と、云つたまゝで念佛して、又、眠つてしまつた、翌日のあさ八時に遂に往生を遂げました、我身は現に死に瀕してゐながら、然も病苦に責められながらも、自分の事はうち忘れて、我子のゆくすゑの事のみを、憶ふて念ふ、世に親程尊いものはない。

憶念

大體、「憶念」とは憶持不忘といふ事で、忘れやうとしても忘れられない憶ひづめの心をいふのである、憶ひは大なる活動である、たゞ手足口舌の運動のみを以て活動と思ふは誤りである、われは親より憶はれ、妻より憶はれ、子より憶はれ、又多くの道友より憶はれる、然も罪惡のかたまりである汚い心の中から勿體なくも如來を憶はずにゐられないのは、全く如來の憶ひづめの御心の顯はれであると思へば云ひやうのない嬉しさを覺へます。

自然卽時入必定

八、「自然に卽の時、必定に入る」といふは、私達が如來樣の本願を信じた一念の時に佛力他力に依つて、卽時に、必ず佛に成る事に定まつて、再び退く事のない正定聚不退の位に入ることをいふのである。

「自然」とは、私達人間の力に非ずして、彌陀如來の力より助けしめ給ふといふ事である、「必定」とは、不退轉とは正定聚とも申して必ず佛になることに定まつて、再びあとずさりをせない位を指さすのであります。

九、かくの如く、私達が如來を信ずる一念に、直ちに救はれて、現在では不退轉の位に入り、未來は必ず佛に成るといふ、かゝる廣大無邊の幸福をあたへられたにも拘はらず、如來は私達に對して、何一つの報酬をも命じ給はぬのである、然し命ぜられない程せずに居れない氣持がする、然らば何を以て報謝とせんか、私達には虛假の行、雜毒の心より外に如來に捧ぐる清い美しいものは何一つも持たぬのである、然し唯一つ、信心に依つて惠まれた如來の御名、南無阿彌陀佛、これのみは私達の持つてゐる唯一の清淨なものである、龍樹菩薩は貫ふた品で御馳走して貫ひ主に捧げる如く、如來より賜はつた南無阿彌陀佛の名號を稱へつゝ、御恩の深き事を讃嘆せよと奬めて下さつたのであります、然も菩薩は、私達に奬

唯能常稱
如來號
應報大
弘誓恩悲

められると共に、菩薩自身の生活の上に、此御名を信じ此御名を稱へて、大悲の御恩を報いられたのでありました、この意をいま「唯能く常に如來の號を稱へて、大悲弘誓の恩を報ずべし」と仰せられたのであります。

「唯」とは、簡持、決定、顯勝の三意が含まれてあつて、簡持とは他のものを簡び排して此稱名一つが報恩の本である事を示し、次に決定とは報恩の行といへば此號が最も勝れてをると云ふ事を顯はされたのであります、「能く」とは、堪能といふ意味で、如何なる人でも、勤められ堪へられるといふ意を表されたのである、「常に」とは、相續の意味で、何時も變らず行住坐臥に御名を稱へ、其聲をきいて大悲弘誓の恩、卽ち如來の大慈悲の廣大なる佛恩を喜ぶ事であります。

念佛すれば何故報謝になるか

一〇、それでは、如來の御名、南無阿彌陀佛を稱へば何故佛恩報謝になるやといふに、今二つの譯をあげますと。

一には私達が信心を得れば、阿彌陀如來は深く喜びまし〳〵て、其御身より八

佛が滿足し給ふ

萬四千の大きなる光明を放ちて其人達を抱き給ふのである、これ卽ち信心の人が佛の御心にかなひ奉り佛が滿足し給ふ故である、而して其の人が信心の上より南無阿彌陀佛と稱ふる事は其信心が私達の口に顯はるゝものとして佛は之を聞きたまひ、「よくも其身になつてくれた事よ」と滿足に思召すのであるから稱名が報恩の行となるのである。

不良青年の子を持つ親

一一、私の宅で、一時女中變りを勤めてくれてをつた、吉田おみねといふ、至極おとなしい信心深い婆さんがあつた、主人を定一と云つて、外國貿易が當つて七八萬圓の財產を作りあげて、一時は山手邊で一家を構へ、夫婦の仲に良一と云ふ子迄あげて、家內三人、睦まじく暮してをつた、ところが、この良一が十七八歲の頃から酒色に溺れて遊廓通ひをはじめ出し、學校は半途で退學し、警察からは、不良青年としてにらまれるやうになつてきた、父はそれを氣にして遂に先達つた、良一は長ずるに從つて無賴の仲間に加はつて、家も屋敷も人手に渡し、老たる母親を里方の叔父の方へ預けて、本人は大阪、東京邊をさ迷ふてをつた、母のおみねは、弟の宅で氣兼ねをして、遂に私の方へ來ることになつたのである、ところが不幸の者はどこまでも不幸で、おみねは、私の宅へ來て、一年半目に重い傻麻質斯を患ふて、半年ほどそれは〳〵苦しんだ、すこし足が立つやうになつて、また弟の宅へ行くといつてひまをとつた、良一は各地をさまよふた揚句、終に上海に渡つて、ひどい脚氣にかゝり、或る病院に入つて、病は追々增進するばかりで、或日「良一病氣危篤」の電報が、母のおみねの手に屆いた、おみねは大に驚いて、不自由の身を持つて、上海へ往くと云ひ出した、弟のとめるのも聞かずに、姪を使はして、私の所へ旅費を借りに來た、それより一本足で松葉杖をついて、知らぬ上海へ單身老人の身をもつて出かけて行きました、病院はすぐに分つたそうなが、三日三夜帶をもとかずに、寢食を忘れて誠心こめて介抱をしたが、遂に心臟を侵されて、空しく異國の空で良一は死亡した、おみねは一夜泣

きあかした、冷たい白骨を首にさげて、また松葉杖をついて歸朝した、其儘姪に連れられて私の所へたづねてきた、おみねは云ふ「自業自得とは云ひながら、院長様も大へん親切に御心配下さいますし、私も一生懸命介抱をしてやりましたが、みんな水の泡となりまして、こんな、すがたになりなした、と、(白骨をみせ)……涙にむせびつゝ……、「しかし先生喜んで下さい、死にました日の午前八時頃に、良一が私に申しますには、「お母さん、今となつては、何とも申譯がありません、四十五歳になつた今日迄、あなたに御心配と御苦勞のありだけをさせました上、御恩の萬分の一も報ゆることをせず、このまゝ死んでゆくと思へば殘念で致方がありません、たゞ今までの、私の不孝の罪、どうか御許し下さいませ」と兩手を合はせて泣いてあやまりました、私はたゞ、うれしくて〳〵四十五年の夢がさめて、本心に立ち歸つてくれたかと思へば、私も、手を合はせて、うれし泣きに泣きました、その日の午後六時頃にとう〳〵亡くなりました」おみねは、また同じことをくり返して「たとひ死する日になつてからとはいへ、本心に立ち歸つて命が亡くなつたかと思へば、私は嬉しくてなりませぬ」と、聲を出して泣くのであつた。

死期に臨んで「許して下さい」のあやまつた一言で、四十五年の不孝の罪は、一時に帳面の「棒引――」、なんといふ深い〳〵お慈悲であらうか、私も思はず貰ひ泣きをした。

無始曠劫の昔より、私の爲に御胸を痛め給ひし親、お慈悲も御恩も打忘れて長い間心配かけた不孝の子、更に怨めしとも思召さず、私一人にかゝりはてゝ「種々に善巧方便し、われらが無上の信心を發起せしめたまひけり」いまこのくちから、一聲「南無阿彌陀佛」の御名を稱へば、如來は、この聲を聞き給ひ、積功累德の御苦勞を打忘れて、「よくも其身になつてくれた事よ」と、久遠劫來の私の罪は信心一つで棒引にしてくださるのだ、私は、おみね婆さんを拜んで思はず念佛い

たしました。

蓮如上人は曰く、

「當流の安心の趣を、委しく知らんと思はん人は、強ちに智慧才覺もいらず、たゞ我身は、罪深き淺ましき者なりと思ひとりて、かゝる機までも助け給へる佛は、阿彌陀如來ばかりなりとしりて、なにのやうもなく、ひとすぢに、この阿彌陀佛の御袖にひしとすがりまゐらする思ひをなして、後生をたすけ給へと頼み申せば、この阿彌陀如來は、深く喜びまし〳〵て、その御身より、八萬四千の大きなる光明をはなちて、其光明の中に其人を攝め入れておき給ふべし」と、仰せられたのは、全くこの意味であります。

利他の德を顯はす

一二、南無阿彌陀佛を稱へば、何故報謝になるかといふ、も一つの意味は佛の御名を稱ふれば、利他の德をあらはして廣く十方に及びて、無量の衆生を化益せしむるが故に報恩行となるといふのであります、依つて親鸞聖人は、

兵庫の人の病床法話

「無慚無愧のこの身にて、まことの心はなけれども、彌陀の廻向の御名なれば、功德は十方にみち給ふ」と仰せられました。

一三、川崎の造船所に働いてゐる人の家であつた、老母と夫妻と、二人の子供との五人暮しであるが、生計が豊かでない上に、其家族の人々の氣分が色々であつて、日々の生活が左程幸福なやうにも見うけなかつた、兄息子の十九歳になるのが、永らく心臟を患つてゐる、宗旨は眞言宗といふことであるが、其は名ばかりで、少しも法の薫りがなく、其の子の病について、彼方此方に願をかけたり、祈りをこめたりして、餘り醫藥を用ひなかつた爲に病は益々重くなつてきたといふことであつた、私の所へ法話をしてくれと頼みに來られた、鳥居さんと一しょに其家に入つてみると、五六人近親の人が集まつてゐた、中には天理教の教師の服裝をつけた人もゐたやうである。

私は、遠慮なく、大きな聲でお念佛を稱へてをつた、病人はいかにもくるしげ

に、顔をあげて、私の顔をつくづくながめた、私は「南無阿彌陀佛が、聞こえるかね」と、尋ねた、病人は「聞こえる」とうなづいた、私は「一所にお稱へなさい、口で稱へられずば、息の下でよいからお稱へなさい、是れが如來さまから下さるお淨土參りのたねです、如來さまはこれだけで助けて下さるのです、これで助けられるのです」と、いふて掌を合せてやると、病人は如何にも喜ばしげに「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と、二聲稱へた、私は重ねて曰ふた、「南無阿彌陀佛」と稱へた力でたすかるのではない、稱へられて下さる、南無阿彌陀佛の御力で、たすけて下さるのですよ」と、いふたとき、苦しい中に、ニッコと笑つたまゝで、靜かに最後の息を引きとつた、息が切れても、笑ひ顔であつた、私はその尊いすがたに合掌して歸つたのでありました。

南無阿彌陀佛、何といふ單純な語であらう、併し又何といふあきれ果てた不思議な力が顯はれるのであらう、死んでも生きても迎へられる一道である、私達は、この龍樹菩薩や親鸞聖人のおすゝめの通り、大悲弘誓の御恩を憶ひつゝ、稱名をおろそかにせないやうに、心懸けたいものであります。

第二十五講　天親菩薩と無碍光如來

天親菩薩造論說　天親菩薩論を造りてとかく、
歸命無碍光如來　無碍光如來に歸命したてまつる、
依修多羅顯眞實　修多羅に依りて眞實を顯はし、
光闡橫超大誓願　橫超の大誓願を光闡し、

一、この四句は、印度に於て、第二番目に擇ばれた天親菩薩のみ敎を、其著『淨土論』に依つて、その御心を顯はされたものであります。

二、天親菩薩は、世親菩薩とも言ひ、釋尊滅後凡そ九百年の頃、先師龍樹大士より遅れること四百年にして、北方印度のヒマラヤ山の麓、健馱羅國の都である富婁沙富羅といふ所にお生れになつたのであります、此都は氣候が温和で風俗が醇雅で、穀物も豊かに實り、百果麗しく熟して、市民の凡てが宗教心に厚く、道德を守り學を修め、眞にこの世の理想鄕とも云ふべき所であつた。

菩薩には兄弟が三人あつて、兄を無着と言ひ弟を師子覺と申され、孰れも佛門に入り、三人共初めは佛教の小乘教を研究せられてをつたのであるが、第一の兄の無着は小乘教に滿足が出來なくなつて、大乘教の方に代られたのであります、其教理の極意を究めんために屢〻兜卒天に昇つて、彌勒菩薩の教を受けられたと言ひ傳へられてある程の優れた學者であつた。

小乘の奥義を極む

然るに、弟の天親菩薩は深く小乘の教理に固執して其奥義を究め、當時印度に於て殆んど肩を並べる者の無い程の勢ひであつた、かの有名なる『倶舍論』を作られて、盛んに小乘薩婆多部の宣傳に努められ、殊に大乘の教法を種々に批難攻撃し、而も大象の上に、自作の倶舍論の偈頌を大書したる板を掲げて、懸賞で敵手を求めて歩かれたが、終に誰一人天親菩薩の論法に敵する者がなかつた位であつた、かくして菩薩は小乘に關する著書を五百部も書かれて小乘有部の教を大成せられたのである。

無着菩薩

ところが兄の無着は弟の天親が小乘に固執して、而も大乘の正法を誹謗せる罪の輕からざることを深く憂ひて、特に病と稱して、故鄕に歸つてくるやうと使ひされたのであつた、天親は驚いて直ちに兄上の處へ歸つてみると無着の別に病氣らしいところもないのを不審かしく思はれ「何故、あなたは病氣だといはれましたが、少しも病氣らしい處がないではないか」と詰られました處が、兄の無着は「我が病氣といふのは身體の病氣ではない心の病氣である、それは汝が、つねに小乘の研究ばかりをして、大乘を謗り正法を罵ることが最も苦しい我が心の病

である」といはれて、『華嚴經』の十地品をあたへられたのである。

一度天親がこの經典を繙かれて讀まるゝに當つて、其意義の深さ、教法の尊さが、いかにも小乘の教よりも、はるかに優れてをることに驚愕せられ、而もかういふ深刻なる妙法を、今日まで知らずにゐたとは云ひながら、之を誹つて居たことが非常に愧かしく思はれ、遂に悔恨のあまり、自ら刀を執つて、正法を謗つた舌を切つて自殺せんとせられたのであります、それを兄上の無着が見付けられ、

舌を切らんとす

「汝が其舌を切つて何になる、そんな事で汝の罪が滅びるものと思ふか、それが小乘魂といふものだ、決して重き罪根は自殺しても亡びない、それ程に悔ゆるなれば、謗つた其舌で今より大乘を說き弘めてこそ、その罪が滅びるといふものだ」と訓へられました、この兄上のうるはしい情誼によつて天親は翻然として心を改め、眞理を謗つたその舌で、大乘の眞理を讃嘆せんと決心せられたのである、爾來菩薩は專ら大敎の敎理を研究し遂に其奧義を極め、また大乘についても五百部

の著述を造られ、後世、天親菩薩を千部の論師と申上ぐるにいたつたのであります、彼の有名なる萬法唯心の主體とせる「阿賴耶識」の思想を說かれたる『唯識論』の如きは全くこの菩薩の著はされたるものであります、かくて菩薩は終に御年八十にして御往生せられたのであります。

信仰の確立

三、然しながら親鸞聖人が、天親菩薩をなつかしく思はれたのは、菩薩が千部の論を造られたといふ大學者であるからでなくて、菩薩が大乘敎の研究を深められてゆく中に、『大無量壽經』を讀まれて純他力の妙味にぶつつかられて、いよいよ圓滿に信仰を確立せられ自己の信念を表す爲に『淨土論』といふ、信仰の告白書を書かれたのである、この信心の書こそ親鸞聖人のたましひを躍らし、從つてお慕ひせずにゐられなくなられたのである、依つていま本偈に「天親菩薩論を造つて說かく」と叫ばれたのである、論とは卽ち『淨土論』のことで、委しくは『無量壽經優婆提舍願生偈』といふのであります。

天親菩薩造論說

歸命無碍光如來

四、 天親菩薩はその『淨土論』の初めに、卒直に自己の信念を表白せられ「世尊よ、我一心に盡十方無碍光如來に歸命して、安樂國に生れんと願ふ」とのべられてゐます。

「無碍光如來」とは、詳しく言はゞ「盡十方無碍光如來」といふことで、卽ち阿彌陀如來のことである、阿彌陀如來はつねに私達の心靈の外にあつて而も吾等の心靈の底へまで至り屆いて下さる眞如の體驗者であります、この如來の靈光は、いつも神通自在の靈妙の力を顯はし、私達の汚れたる心を淸め、古き心を新しくして、竟には如來の御心と同じものに育て上げて下さるのである、而してこの不可思議なる御力に對しては、何物も邪魔することが出來ない、此謂れによつて阿彌陀如來を「盡十方無碍光如來」と申すのであります、わが親鸞聖人があけくれ御本尊として拜まれたみ佛はこの「歸命盡十方無碍光如來」のみ佛であつた、殊に北日本の白雪の寒空に逍遙はれ、東北の荒野に道を說かれて、疲れた御身を投げ出して合掌せられた御本尊は、正しくこの十字の名號であつたのだと思へば、言ひ知れぬ懷しさを覺ゆるのであります、聖人は其著『尊號眞像銘文』に、

「盡十方無碍光如來と申すは、卽ち阿彌陀如來なり、この如來は光明なり、盡十方と云ふは、盡はつくすといふ、ことゞくといふ、十方世界をつくしてことごとくみち給へるなり、無碍といふは、さはることなしとなり、衆生の煩惱惡業に碍へられざるなり、光如來と申すは、阿彌陀佛なり、此如來は卽ち不可思議光佛と申す、この如來は智慧の相なり、十方微塵刹土にみち給へりとしるべし」と述べられて、阿彌陀如來は、十方世界にみち〳〵て、到らざる所はなく、殊に無碍とは私達の惡業煩惱にさはりなく、心靈のうちに入りみちて下さるのである、私達は偏に自己の迷心を拋てゝ、この廣大威德の如來を信じ奉るべきであります。

依修多羅顯眞實

五、 次に「修多羅に依つて眞實を顯はす」とは、かゝる天親菩薩の確き信念は、修多羅とはお經のことであつて、卽ち三部經に依られたのである、中でも主とし

て『大無量壽經』に依つて眞實を表されたのである「眞實」とは、まことの本體たる南無阿彌陀佛の功德を顯はされたのであります。

光闡横超大誓願

六、「横超の大誓願を光闡す」といふは、私達凡夫の往生することも、往生してゆく所の極樂の莊嚴も、皆阿彌陀如來の他力本願のなさしめ給ふ所であると、天親はお示し下されたのであります、「横超の大誓願」とは如來の本願は一念に無量劫を超える故に横超の大誓願といふのである、「光闡す」とは、大に開きたまふといふことで、菩薩の『淨土論』に阿彌陀如來の淨土の莊嚴の狀態を開き示して、

三嚴二十九種莊嚴

三嚴二十九種として、左の如く記されてある。

一には、國土の莊嚴――之に十七種
二には、阿彌陀佛の莊嚴――之に八種
三には、諸菩薩の莊嚴――之に四種
} 合して三嚴二十九種の莊嚴といふ

之れ皆阿彌陀如來の願力より出來たもので、凡て私達を滿足せしめて下さる爲の莊嚴であると、天親菩薩は此如來の大誓願を開いて我々にお示し下されたのであります。

土田平兵衛

七、私の鄕里、播州の河内村に、土田平兵衛といふ信心深い爺さんがあつた、私の祖父確方師と至つて親しみが深かつたやうである、毎度私の寺へ出入りをしてをりました、或時、平兵衛が京都の本願寺へ參詣して、歸り途に我寺に立寄り草鞋を脱がぬまゝで、

「和上さん、私は京參りをして、今が歸りがけぢやが、こんどは三十三間堂へ參つてみたが、夥しい佛樣が並んで御座るが、平兵衛の後生を引受けて下さる佛は、たゞの御一佛もましまさぬ、ところが御本山へ參つてみれば、たのみもせぬのに先方さまから、平兵衛助くるぞ、世話してやるぞ、引受けさせよ、と呼びづめぢや、有難うて〳〵」と、喜ぶ姿を見て、祖父曰く、

「平兵衛よ、その三十三間堂は、柳の樹一本で、棟木が六十六間の間數を貫き、

而もその一本の材木で、アノ大きな本堂までが建つたといふ、また、六角堂は杉の木一本で、出來上つたと云ふわい、平兵衛よ、阿彌陀如來のお淨土は六十六間ではないぞ、究竟如虛空、廣大無邊際といつて、それは〳〵大きなお淨土で、そのお淨土には、三嚴、二十九種の御莊嚴でかざりたてゝあるげな、而もそのお淨土は、如來の願力一つで御建立ぢや」と、云ふてきかされると、平兵衛は、驚き入り、

「エライことぢやナー、それが、この平兵衛一人の爲に出來たのぢやナー」と泣いて喜んだそうである。

親鸞聖人は、和讃に、「安養淨土の莊嚴は、唯佛與佛の知見なり、究竟せること虛空にして、廣大にして邊際なし」、「如來淨華の聖衆は、正覺のはなより化生して、衆生の願樂こと〴〵く、すみやかにとく滿足す」と讃嘆せられました。

天親菩薩は、かくの如く淨土の莊嚴をひらきて、其あらゆる莊嚴も國土も佛も聖衆も、その源は入一法句、即ち、こと〴〵く如來の願力、眞實の智慧から顯現したものであることを示して下されたのであります、われらは日夜大悲の御親に伴はれて、この苦惱のない淨土に向ふてをるのである、まことに有り難いことであります。

第二十六講　本願力廻向の一心

廣由本願力廻向　爲度群生彰一心
歸入功德大寶海　必獲入大會衆數
得至蓮華藏世界

廣く本願力の廻向に依りて、
群生を度せんが爲に一心を彰はす。
功德の大寶海に歸入すれば、
必ず大會衆の數に入ることを獲、
蓮華藏世界に至ることをうれば、

卽證眞如法性身　卽ち眞如法性の身を證せしむ。
遊煩惱林現神通　煩惱の林に遊んで神通を現じ、
入生死薗示應化　生死の薗に入て應化を示すといへり。

廣由本願力廻向

一、「廣く本願力の廻向に由りて群生を度せんが爲に一心を彰す」――以下の句は天親菩薩の淨土論の示されたる要旨であつて、菩薩自身の信念を述べられたばかりでなく、廣く一切の群生を救はん爲に、本願廻向の一心の道理をあらはし、南無阿彌陀佛の御名を信ずれば、現在より聖者の列に入り、未來は眞如法性の證りを得て、其のち一切衆生を救はん爲に、再びこの娑婆界にかへり來りて神通を現はし、迷ひの世界に下りて應身化身の相となつて、凡ての者を濟度する身となることを敎へられたのであります。

二、さて「本願力廻向の一心」とは他力廻向の信心のことである、われらが盡十方無礙光如來に歸命したてまつるこの歸命の一心は、決して私達凡夫の心を以てたのむ一心ではなく、全く如來の願力よりわれらの心に廻し向けしめ給ふ御心である、卽ち私達が彌陀一佛をたのむ一心歸命の信心は、全然如來より賜はるものである、大體人間の心のうちは、憎み心、嫉み心、怨み心、苦しみ心、貪り心、愛執の心、などの亂れ心より他にはないのである、其人間の心の中に佛の大悲を仰ぎ、如來のお慈悲に氣づいたこの心は全く佛の心が人間の心に展開して來て、人間をして目醒めしめ、眞實に生きやうとする心が發つてくるのである、之を本願力廻向の一心といふのである。

本願力廻向の一心

三、仍て、この心は私の心のうちにあつて私の心でない純一無二の佛の心である、至誠（至心）の心である、無疑（信樂）の心である、進趣（欲生）の心である、これ全く如來本願の三信（至心、信樂、欲生）を統一したる一心である、之を合三爲一の一心と稱し、天親菩薩獨特の信念の表現であります。

合三爲一

四、よつて救ひとは、私達が死んでから極樂へ參つて助けられる事ではなく、また臨終に如來に依つてつかまへられることでもない、佛に救はれるといふことは、われらの心(主觀)に佛の御心が生れてくることである、卽ち如來の御念力より如來の心が人間の心の中に生れきて、われらの心を改造さす事であります、言ひ換れば、一心とは人間のわれらが如來のお慈悲をつかんでゆくたしかさではなく、如來によつてつかまへられてゐるたしかさにめざめた心である、卽ち親の心が子の心に泌み込んで、凡て親の心に生きてゆくすがたであります。

香樹院師の說敎

五、香樹院師の說敎を聞いて或人が、「あなたの說敎は、どこもとらまへどころがない」と云ふた時、師は「それは其筈だ、おれは、とらまへられぬやうに、とらまへられぬやうに說敎をして居るのだ」と、申されたさうである、實にその通りであります、私達はすこし喜ぶ心が起れば、すぐに其れがとらまへたくなり、殊勝な姿が見ゆると其れがとらまへたくなるのである、古來から、「異安心」といふのも、つまり、如來にとらまへられる吾が身といふこと氣付かずして、自分に如來をとらまへやうとするから間違ひがおこるのである、兎角、とらまへたくて〳〵ならぬのが私達凡夫の病であります、「信心」と云へば「信心」の言をとらまへる、「たすけ給へ」と云へば「たすけ給へ」の文字をとらまへる、「體驗」といへば「體驗」をとらまへる、「主觀」といへば「主觀」をつかまへる、いつの間にか自分で如來迄をとらまへた氣持になつて、我物顏をして他人の信心までを裁かうとさへする者がある。

とらまへられて

これは、如來をとらまへたつもりで惡魔をとらまへて居るのである、然るに如來は、無限のお慈悲を以て、私達に「汝はとらまへるのではない、おれが汝をとらまへるのであるぞ」と呼んで下さるのである、仍て信心とは、南無阿彌陀佛にとらまへられてをることに氣付いたことをいふのである、それが救はれたといふのであります。

願作佛心

度衆生心

六、天親菩薩は、如來のおこゝろが吾等の凡夫の心の上にひらけてきた心持を「願作佛心」とも申されてをります、而してこの願作佛心――佛と作りたいと願ふ心が――われらの心に生れてきたのは、全く如來が吾等をして願生せしめたい――佛にしてやりたい――と思召す佛心が到りとゞいて下されたからである、即ち如來の「度衆生心」の顯はれが「願作佛心」となつたのであると仰せられてあります、平たくいへばわれらの心に佛になりたいと願ふ心の起つたのは、われらを佛にせねばをかぬの御心より顯はれたものである、これを信心といふのである、この信心こそ全然私の心でなく、源と如來の願心より出たものであると示されたのであります、親鸞聖人は、この心を、

「願作佛の心はこれ、度衆生の心なり、度衆生の心はこれ、利他眞實の信心なり」

「信心即ち一心なり、一心即ち金剛心、金剛心は菩提心この心即ち他力なり」と

詠じて、天親菩薩の一心歸命の信心は、あくまでも他力廻向の佛心の展開であることを讃嘆せられたのであります。

五念

歸入功德大寶海、必獲入大會衆數

七、仍て、一心といふも、信心といふも、金剛心といふも、菩提心といふも、たゞ如來のわれらをたすけたい、救ひたいの御心の顯はれより他にはないのである、たとへわれらの「一拜の敬禮」も、「一聲の稱名」も、「如來を慕ふ心」も、「お淨土を憧がれる心」も「他人に道をすゝめる心」も、ことゞく如來廻向の一心の顯現ならざるものはない、いま私達が道を求むる心――佛になりたいと立ちあがつたこの心は、全然私が思ひ立つたのではなくて、如來が私の上に來りて私をよびあげられたから私が佛になりたいと立ちあがつたのである。

八、「功德の大寶海に歸入すれば、必ず大會衆の數に入ることを獲」――功德の大寶海とは南無阿彌陀佛の名號のことである、此名號の中には、恰かも大海に多くの寶を藏めてをる如く、名號六字の中に凡ての萬善の功德がみち〳〵て限りなき故に、名號を海に喩へられたのである。

得至蓮華藏世界、即證眞如法性身

そこで、私達は一心に此南無阿彌陀佛に歸入して名號を信じ念佛を申す身となれば、この信心が淨土に往生する正因（往相廻向）となつて、この世から正定聚の位に入つて、現在から淨土の聖者の大會數の仲間に入る身となり獲るのである、聖人は和讃に「本願力にあひぬれば、むなしくすぐる人ぞなき、功德の寶海みち〳〵て、煩惱の濁水へだてなし」、「超世の悲願きゝしより、我らは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねど、心は淨土にすみ遊ぶ」と讃仰され、我らの心はもとより粗末な穢肉に包まれて、迷ひの世界に生存してをるが、一面にはすでに我が心は如來よりあたへられたる南無阿彌陀佛の大生命と一致して、現在から心は如來の御國にすみ遊ぶ身にしていたゞくのである。

九、そして、命終れば、御親の淨土に往生して、眞實の證りを開かせて頂くのである、そこを「蓮華藏世界に至ることを得れば、卽ち眞如法性の身を證せしむ」と仰せられたのである、「蓮華藏世界」とは阿彌陀如來の淨土の事である、彌陀の淨土のことを大經には「衆寶の蓮華、世界に周滿せり」とも說かれ、恰も蓮華が泥中に在りてその濁りに染まぬ如く、如何なる惡業煩惱にも穢さるゝことなき德を藏めたるところなる故に蓮華藏世界といふ、而して私達が此世界に生るゝや久遠劫來の煩惱の衣服を脫ぎ、淺ましき業の制限をぬけ出でゝ卽時に阿彌陀佛と同一の眞如法性身といふ證りを開くのである、今眞如といひ法性といふは孰れも平等の眞理を體得せる「證り」の德を顯はされたものであります。

遊煩惱林現神通、入生死薗示應化

一〇、なほ、そればかりではない、われらが淨土に往生して、如來と同じ智慧をさとり、如來と同じ慈悲心を得るから、他の衆生を濟度したい想ひが起るのである、そこを「煩惱の林に遊んで神通を現はし、生死の薗に入りて應化を示すとのたまへり」と申されたのである、「煩惱の林」とは私達人間の境界を顯はされたもので、貪慾、瞋恚、愚痴、憍慢、疑惑、身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見等の多くの煩惱が、恰も草木の繁れる如くむらがり起つてをる世界である、然る

にひとたび眞如法性の證りを得て如來と同じ身となれば、またもやこの煩惱の密林の中に遊履して神通力を現はし、思ひのまゝに一切衆生を濟度することを得るのである、之を還相廻向と云ひます。

「神通」とは不思議なる通力といふことで、われらは眞如法性の身を證つても活動なき死滅の狀態にあるのでなく、再び穢國に還り來りて凡ての衆生を救ふのであります、大經の四十八願の中に六種の神通力が誓はれてある、即ち一には過去世の一切の事を知りつくすことの出來る宿命通、二には一切世界の萬物を見拔くことの出來る天眼通、三には一切の音聲を聞き得ることの出來る天耳通、四には一切の衆生の心の中に思へることを知りつくすことの出來る他心通、五には一切の世界へ自由に行くことの出來る神足通、六には一切煩惱の束縛を脫することの出來る漏盡通、が說かれてある、是等の神通力を備へて、時と處の別ちなく流轉せる有緣の者を濟度する活動をなすのである。

利他と愛他の生活

「生死の薗」とは三界六道の生死に苦しめる世界のことである、即ち再びこの娑婆界に還り來つては、相手の衆生に應じて各種の身を顯はして其敎化の効を奏するのであります、「應化」とは衆生の根機に從つて應身化身の佛となつて一切の衆生を抱へて利他と愛他の生活に奉仕することを示されたのである。

一一、之に依つて私達もたゞ〳〵菩薩の勸誘に從ひ奉りて、一心歸命の安心に住し、來世、淨土に往生して、大會衆の數に入り、かくて再び煩惱の林に遊んで神通を顯はし有緣濟度の大事業を果さなければならぬ、このたのしみと、この望みがあればこそ、私達は現在生活の意義を得、生死の苦海は今や求道と報恩の道場であることに氣付かせて頂くのであります。

第二十七講　第三祖曇鸞大師と其信心

本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解
報土因果願誓願

本師曇鸞は梁の天子、
常に鸞の處に向つて菩薩と禮し奉る。
三藏の流支淨教を授けしかば、
仙經を焚燒して樂邦に歸し給ひき。
天親菩薩の論を註解して、
報土の因果誓願をあらはす。

一、釋尊によりて此世に蒔かれた彌陀佛の救ひの御心の種子が、龍樹、天親、の二祖の胸に植つけられ、夫が次から次へとたくさんの人々の心に芽がふいて印度の他力信仰は、遂に遠く國境を突破して、支那の人々の心の上に傳はつてきたのであります。

淨土教支那に傳はる

元より、以前から支那には佛教は渡來してをつたが、眞實他力の妙味を說くのではなく、たゞ經典の飜譯のみが盛んであつた、いま私達の依用せる淨土の三部經も亦此時代に、康僧鎧によつて大經が譯され、彊良耶舍に依つて觀無量壽經が譯され、鳩摩羅什に依つて阿彌陀經が譯されたのであります。

曇鸞大師生る

二、其頃、支那の五臺山に近き雁門といふ處に生れられたのが曇鸞大師である、それは今より凡そ一千四百五十年前、支那の魏の時代、承明元年の頃、我二十一代雄略天皇の御代にあたる、師は十五歲にもなられない頃より、五臺山の風光に感じて家を出でゝ佛道に入り、深く四論宗を學び『大集經』を讀み大に感ずる所あつて、進んでその註譯書を著はさうとせられたが、之が完成せないうちに重い病の爲に止むを得ず筆をとゞめられる事になつた、それより汾州に轉地療養せられて快癒せられたが、凡そこの世に於て大事を成さんとするには、人間の壽命が

あまりに短いことに氣づかれ、なんとかして之を引延ばす長壽の方法はあるまいかと考へられて、其頃、楊子江の南に隱居してゐた陶弘景といふ仙人をたづねてゆき、無病長壽の祕書として『集醮儀』といふ十卷の仙經を手にいれられたのである、最も强烈なる生命慾に燃へてゐられた曇鸞大師は、この仙經十卷を得て年來の目的を達し、欣然として洛陽の都に歸られたのである。

仙經

菩提流支三藏

三、其時、恰も洛陽の永寧寺に在りて、諸經論の飜譯に從事してゐられた菩提流支三藏に出會ひ、曇鸞は三藏に向ひ佛敎の中にも、この「仙經に勝る長生不死の方法ありや」と質されたところ、三藏は、鸞師の言の未だ終らざるに、喝！と大地に唾きして言はるゝやう「夫れはまた何たる愚な言であらうか、この世界の何處に長生不死の神法があらうぞ、たとひ、かりに長壽の方法はあつてもそれは暫らく壽命を保つのみである、みんな一度は死なねばならぬが人間の運命である、しかしほんとうに永遠に長生不死の道を求むるならば、我が佛道よりほかにはないのである、是をよく見られよ」と云はれて『佛說觀無量壽經』一卷を授けられ「これこそ永久に生きる大法である、之に依つて如說に修行せば必ず生死を解脫して、阿彌陀佛の淨土に生るゝことを得ば、その壽命は無量壽である、これこそ眞の長壽の妙法である」と敎へられました、こゝに於て鸞師は初めて『觀無量壽經』を心讀し、飜然として覺らせられ、「そうだ、人間はどうしてみても死ぬることにきまつてをる、これが人生の事實である、もし人間が眞實に長生不死を望むならば、この無量壽佛と一致して、この力を體得せねばならぬ」と決心して、ついに陶弘景より得たる『仙經十卷』をやきすてゝ、觀無量壽經のうちに祕められたる如來の願力に乘托せられたのであります、大師は此時五十一歲であつた。

長生不死の法

大師の入信

四、かくの如く曇鸞大師は、五十一歲に入信せられ、六十七歲にして往生せられました、その間、僅かに十五年であつたが、大師の人格には當時の大衆は擧つて歸依し、殊に、南方支那の梁の天子、蕭王(武帝ともいふ)は、深く曇鸞大師を

本師曇鸞梁天子、常向鸞處菩薩禮

尊敬し、つねに侍臣に對して「曇鸞菩薩」と稱して、師の在ます北方に向つて日夜はるかに合掌禮拜せられたといふことであります、この意をいま「本師曇鸞梁天子、常向鸞處菩薩禮」と、仰せられたのである。

三藏流支授淨敎、焚燒仙經歸樂邦

五、つぎに、「三藏流支授淨敎、焚燒仙經歸樂邦」とは、大師が四論宗の自力門を捨てゝ他力門に入り給ひしことは前述のごとく、全く菩提流支三藏が、觀無量壽經の淨敎をさづけたまひしに依つて仙經を燒き捨てゝ西方淨土の樂邦に歸入せられたのである。

「三藏」とは經律論の三藏に精通したる人といふ意味で、經典飜譯者の通稱であります、而して「菩提流支」は、もと北天竺の僧侶にして、曇鸞大師の三十三歳の時、支那の後魏時代に渡來して、洛陽の永寧寺に居住して、二十八年間專ら佛典の飜譯に從事され、其譯述せるものが三十九部百二十卷に達し、天親菩薩の『淨土論』の如きも、この流支の譯されたもの〻一部であります。

往生論註

六、曇鸞大師が、おひ〳〵他力敎の研究の深まるにつけ、龍樹菩薩の『十住毘婆娑論』を讀み、更に天親菩薩の『淨土論』を味讀せられて、遂に『大經』の奥義を探られました、後に『淨土論』を委しく註釋せん爲に『往生論註』二卷を著はし、絶對他力の深義を明らかにせられたのであります。

而して阿彌陀佛の淨土は徹頭徹尾、如來の誓願の御力に依つて成就したまへるものたることを示し、且その淨土たるや、法藏菩薩の四十八願に酬報いて出來たものゆゑに之を「報土」と稱し、而してその報土をつくり給ふに就ての因も、出來上つた果、すなはち淨土の莊嚴も、みなこれ根本は唯如來の願心――誓願より成就せられたものであることを顯はされて、ます〳〵如來本願の大道を宣揚せられたのであります、この意味を「天親菩薩論註解、報土因果顯誓願」と、讀まれたのである。

天親菩薩論註解、報土因果顯誓願

七、大師は、非常な學者であつて、また其上熱烈な信仰家でありました、其學

問の深かつたことは、當時の印度佛教の思想に、二つの大きな流れがあつて、其一は龍樹菩薩の、「空」の思想と、其一は天親菩薩の「有」の思想であります、而して曇鸞大師は「空」の系統を引いた學者であるから、師の書かれた『往生論註』は、非常にむつかしくて解りにくいのであります。

信念の發表

然るに、その學問の深い曇鸞大師が、一方また非常に信仰の深いお方で、信仰そのものゝ發表が、すこしも理窟ばらない、最も素直なあらはし方をしてゐらるゝのであります、いま親鸞聖人の御和讃から窺ひますと、

「世俗の君子幸臨し、勅して淨土のゆへを問ふ、十方佛國淨土なり、何によりてか西にある、鸞師答へてのたまはく、我身は智慧あさくして、未だ地位にいらざれば、念力ひとしくおよばれず、一切道俗もろともに、歸すべきところぞ更に無き、安樂勸歸のこゝろざし、鸞師獨りさだめたり」と、この和讃の意味は、「世俗の君子」とは、世の身分の高い君主達のことをいふ、その君主達が、曇鸞大師に

西方の淨土を信ず

向つて、「お經には、十方佛國皆淨土、とあつて何處も此處も淨土だと說いてあるのに、あなたは、唯西方淨土、西方淨土と言はれて西の方のみを指さゝれますがそれは一つの偏見ではありませんか」との問ひに對して、師は「私は、あの飼はれてをる牛馬のやうな者である、東西南北到る處の野原には、あらゆる草はあつても、繫がれてをるから、何處へでも行つて之を喰ふことが出來ぬ、してみれば何役にも立たぬのである、役立つて喰ふべきものは、定められた桶の中の草で養はれるより外はない、卽ち差別の境界にをる私はたゞ西方に如來ます、と信ずるばかりであります」と、答へられたのである、「安養淨土の莊嚴は、唯佛與佛の知見なり、究竟せること虛空にして、廣大にして邊際なし」とあるやうに淨土は「究竟せること虛空にして、廣大にして邊際」のないには相異あるまい、もとより十方に佛國があるには相違あるまいが、それは「唯佛與佛の知見なり」で、われ〳〵の測り知る所に非ず、それはたゞ悟りの境界に入らねは、分るものでな

い、吾々差別の境界にをる者は、やはり差別を信じて、平等の理にかなはして貰ふのである、故に差別の西方淨土を信じて、その佛にまかすれば、やがて往生の後、卽ち平等の悟りを開かせて頂くのであると、大經の經文のまゝを、すなほに悅ばれたのでありました。

八、これが支那に於ける最初の淨土敎を弘められた先覺者でありますから、我聖人は、龍樹、天親に次いで第三の祖として仰がれたのである、殊にわが親鸞聖人が、曇鸞大師に深く私淑し給ひしことは、其名の親鸞の鸞の字こそ實に曇鸞の鸞の字を承け給ひ、また高僧和讃には特に三十四首までも作つて大師を讃嘆せられてゐることに於ても知らるゝのであります。

第二十八講　自力他力と往還二廻向

往還廻向由他力　往還の廻向は他力による、
正定之因唯信心　正定の因は唯信心なり。
惑染凡夫信心發　惑染の凡夫信心發すれば、
證知生死卽涅槃　生死卽ち涅槃なりと證知せしむ。
必至無量光明土　必ず無量光明土に至りて、
諸有衆生皆普化　諸有の衆生皆普く化すといへり。

一、われらが往いて淨土に生るゝも、還りて一切衆生を救ふのも、ともに佛力他力に由る、われらはたゞこの他力を信ずる信心一つで淨土往生が定まるのである、たとひどれ程惡業煩惱の濁りに染まつた者も、一と度この信心を發せば、生

死の苦の中にあつて、このまゝ涅槃を味ふことが出來、後には必ず無量光明の如來の御國に到つて、何時でもこの娑婆へ還つて、あらゆる苦惱の衆生を、教化し濟度することが出來るのであると、大師は仰せられたのであります。

往還廻向由他力

二、「往還廻向由他力」――往還廻向とは、往相の廻向と還相の廻向と云ふことである、往相とは如來に救はれたわれらが現在より未來淨土へいたるまでの相をいひ、又還相とは淨土より再びこの娑婆世界へ還つて、多くの惱める者を救ふ相をいふのである、而してこの往相も還相も、ともに阿彌陀如來より我等に廻し向けて下さる大悲の妙用である、これを「廻向」といふのである、これらの二德は一としてわれらの自力より爲す所のものはなく、皆之れ如來の本願力に由つてあたへらるゝものであるから、この意をいま「往還の廻向は他力に由る」と仰せられたのであります。

他力

三、「他力」とは、多くの人々が、世の中を渡る上の自力他力と一つにして、他力といへば恰も乞食根性の、依賴心の如く誤つて考へてゐるやうであるが、他力の信とは、我が全體の働きをやめて、雲の如く水のやうに、佛か神か、又は運命かにまかす事をいふのではない、大體、他力とは「如來力」と云ふ事であつてわれらが自己を開發するのにはなくてはならない力である、梅の樹が梅の花を咲かした事は、梅の木自身が咲かそうとして咲いたのでなく、これを咲かす他の力が加はつて咲かしたものである、それは元より太陽と大地の力に由つてゞあるごとく、またいぢけた子供を素純にするには、最も温かい親の愛が其子供の心に至りとゞかねばまつすぐにはならぬ如く、われらの心もこの他力――如來力を承け容れなければ永遠に開發することは出來ないのである、いま曇鸞大師の示された「他力」の意味は如來大悲の强緣――本願力が、われらの心に振りむけられて、佛を信ずる內因となつて、佛力に目醒めしめらるゝのであると仰せられたのである、仍て、わが親鸞聖人も「他力といふは如來の本願力なり」と鑽仰せられてありま

す、また和讃には、

「信心卽ち一心なり、一心卽ち金剛心、金剛心は菩提心、此心卽ち他力なり」と嘆ぜられてある、「此心卽ち他力」とは、信ずるこの心卽ち如來力といふことである、依つて、救ひの阿彌陀佛を、遠い十萬億土の極樂に置いたり、高いお佛檀の中に祀りこんで、徒らに現世をいとひ、娑婆のこの岸から、おへつらひのやうに稱名して、ドーゾ〳〵と死後のお助けを願ふ鎭西流の乞食的他力の事ではなく、

乞食的他力

また、この世ははかない夢の世だ、苦の土、苦の世界だと、現世を安つぽくあきらめて、あはれに殊勝相に念佛して、今生ではずゐ分無責任な惡事をしてをいたゞ徒らに未來の安樂をのみ願ふやうな西山流の、無力的他力を云ふのではない、

無力的他力

現に我心の中に、現に救ひたまふ阿彌陀佛の御心を念じつゝ一歩一歩お淨土へ進ませて頂く「力」であります。

四、 先年九月の彼岸前であつた、福岡へゆく途中、私は汽車の窓によりかゝつて或る宗教書を讀んで居たとき、だしぬけに隣席の人から言葉をかけられた、話題はそれからそれへと移つていつた、談、終に宗教の事に及んだ、此の人は岡山の某專門學校を居らるゝ教育家らしい、けれども此人は「私は宗教は嫌ひです」といふ、「何故お嫌ひですか」と尋ねてみると「神を信じたり佛を賴んだりすると兎角、他力に賴りますから人間の獨立心を失ひ、依賴心ばかりが强くなるやうに思ひますから嫌ひです」といふ、なるほど、利己的の自分の慾望を聞き入れて貰ふ爲に、神や佛を遠い高い所に飾つておいて、自分とかけはなれた他力を、賴むと心得てをる人達、卽ち盲目的に不健全なる利己的依賴心を滿たす爲に、神や佛を迷信の對象として祈るものには、かく考へられるのは當然であらう、そこで私は尋ねてみた。

宗教の嫌ひな譯

「あなたの御一家では、何かを祀つて禮拜などはなさいませんか」

彼曰く「私の老母は、大變不動尊凝りで、朝晩必ず御禮をしてをります」

不動尊凝り

私「では、貴方は其不動尊に對して禮拜をした事はありませんか」
彼「私も時々いたします、それは母が御禱りをすれば、御利益があると申しますから」
私「すこしは御利益がありましたか」
彼「イヤ、ちつともありません」
私「それで、貴方の宗教の嫌ひな譯がよく分りました、大體、不動尊は貴方の利己的慾望を聽き屆ける爲の、迷信的存在ではありませんからねえ」
彼「夫では成田の不動に參詣するのも迷信と申されますか」
私「サア、世間の成田へ參詣する人は、果して不動尊の如何なる方にて在はすかといふことを心得て詣つてをるかどうかゞ問題ですよ、たゞ無茶苦茶に、自分勝手なお願ひをしてをるのではないでせうか」
彼「でも、料理屋の妻君とか、相場師等が澤山參るところからみると、きつと何か御利益があるのではムいますまいか」
私「夫が迷信ですよ、不動尊が不正な貪慾を一々聽き屆けてたまるものですか」
彼「それでは不動尊とは、どんなお方でムいますか」
私「不動明王は五大尊王の一で、大日如來が一切の惡魔を降伏せんが爲に變化して、眼を怒らし兩牙を咬み、右手の利劍を持つて、私達の煩惱の慾を斷ちきり、左手の索は方便の自由なることを示すもので、相場師などが一攫千金を夢みて、たゞ相場に勝たう〳〵といふ慾心の祈禱を捧げる如きは、全く不動尊の御尊意に反ける迷信をやつてゐるのです、不動尊の御尊意はそんな低い祈願の對象とならるゝ御方ではない、とかく世の我慾に迷へる者を憐み、迷信の幻影に賴らんとしてゐる者を、救ひ出さんとせらるゝ所の、衆生濟度の表象ですよ」
彼「なる程、痛み入りました、全く私も迷信に陷つてをつたのですねえ」

私「ですから、眞宗の宗敎は全然迷信を排して、私達の幻滅的依賴心を去つて、本當の獨立心を確立するものです、親鸞聖人は、「心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海に流す」と仰せられて、この世の親に賴らず子に賴らず、家に賴らず金に賴らず、三世の佛に賴らず、十方の菩薩に賴らず、天地の神に賴らず、內外の人に賴らず、善根に賴らず功德に賴らず、二に賴らず三に賴らず、たゞこの如來廻向の佛力と一つになつて、この眞實の一道を獨步せられた御方であります、この眞實の佛心と一體となつた者こそ、眞の獨立者として世に處することが出來るといふものです、さきに貴方は獨立心を失ふといはれたは、それはどれ程の堅實さがありますか」

彼「恐れ入りました、人間の獨立心も强いやうに見へますが、私も先年一人の子供を亡くしました時は、天理敎や金光敎にずゐ分迷ひました」

私「それ御覽、根底なき獨立心に何の權威がありませう、獨立者は確固不拔な大地の上に立つた者でなくては駄目です、「かち〳〵山」の狸の泥舟の上に獨立したとて、何の强さがありませう、其れはたゞ欺された空想に過ぎないのだ、これも淺薄な迷信です、可愛いお子さんを亡くされるやうな變事に遭遇せられたら、一度にくづれてしまふ獨立心でせう、そこで人に賴らず我に賴らず心を弘誓の佛地に立てゝ、如來心と一つになつて勇ましく進んでゆく所に、如來力卽ち眞實の他力を感ずることができるのである。

五、げに他力とは願力である、佛力である、如來の外緣力である、この外緣力をわれらがすなほに承けいれる所に、如來の願力に乘ずる信心が生るゝのである、依つて大師は論註に、こゝに佛力住持の不退轉の風光が味はれてくるのである、

「後の學者、他力の乘ずべきを聞いて當に信心を生ずべし、自ら局分することなかれ」と述べられてあります、徒らに世間通途の他力と混同してはならぬのであります。

五念門と五功德門

六、この「往還の廻向は他力に由る」と仰せられた思召を、今少しく詳しく窺ふと、もと〳〵天親菩薩が、其著『淨土論』の上に、吾等の往生の因果を明す爲に、吾等が如來に向つて行ふ所の五念門が因になつて、五功德門の果を得るのであると述べられたのを、曇鸞大師はその天親の五念門は、吾等が彌陀を信ずる一心の顯はれた相であつて、また五功德門も自ら一佛果に收まることを、最も懇ろにお示し下されたのであります。

五念門（因）
- 一、禮拜門—われらが阿彌陀佛を禮拜合掌する行ひをいふ
- 二、讃嘆門—佛恩を念ひ、如來を讃嘆し、佛の御名を稱へるをいふ
- 三、作願門—心を安樂國に向け、一心に往生せん事を願ふをいふ
- 四、觀察門—極樂の三種清淨二十九種莊嚴を心に思ひ浮べるをいふ
- 五、廻向門—他の人々をして往生せしむるやうに勸誘するをいふ

五功德門（果）
- 一、近門—禮拜門の因に依り正定聚の位に入り日々に證の門に近づくを云
- 二、大會衆門—讃嘆門の因に依り淨土の菩薩の數に加へてもらふを云
- 三、宅門—作願門の因に依り淨土に生まれ恰も淨土の屋敷內に入るが如きを云
- 四、屋門—觀察門の因に依り善行の屋に坐し恰も淨土の座敷に坐つた如きを云
- 五、園林遊戲地門—廻向門の因に依り再び煩惱の園に遊びて有緣を濟度するを云

（往相廻向・還相廻向）

この五念門は、ひとへに吾等が彌陀を信ずる一心の中におさまつてをるものである、而して此五念門を修する者は、自然に其報として右の五功德門の佛果を得るのである、また五功德門は、やがてわれらが彌陀を信ずる一心に由つて獲得する一佛果の德を五つに開かれたものであります。

六、されば一心と五念、一佛果と五功德は、たとへば一つのこぶしのうちに五

本の指があつて、一拳を開いて示さば五指となる如く、われらの如來を信ずる一心を開けば五念門となり、五念門を合せば如來より賜はつた一心に收まる、又未來に於てうける一佛果も開けば五功德門の相となり、合せば其實一の阿耨多羅三藐三菩提の佛果に收まるものであることを示されたのであります、而してこれらの往相の因も果も、われらの力に依つてなす所の物は一つもなく、全く佛力他力のなさしめ給ふ所以を最も明瞭にして下されたのが偏に曇鸞の功績であります。

一心五念

大師の功績

七、天親の『淨土論』の上を一見すると恰も自力の五念のやうに見ゆるのでありますが曇鸞に至りて初めて『淨土論』の正意が明らかになつたのであるから、我が聖人は和讃にこゝを「論主の一心ととけるをば、曇鸞大師のみことには、煩惱成就のわれらが、他力の信とのべたまふ」、「天親菩薩のみことをも、鸞師ときのべたまはずば、他力廣大威德の、心(一心)行(五念)いかでかさとらまし」と歡ばれてゐられます。

正定之因唯信心

八、次に「正定の因は唯信心なり」とは、淨土に往生する因は唯信心一つであるといふ意である、たとひ學問はいかに深くとも淨土往生の正因にはならぬ、道德はいかに高くとも極樂參りの正因にはならぬ、祈禱、修行、戒律、善根、それらはいかに立派に出來ても、無上涅槃のさとりを、ひらくためにはならぬのである、唯佛になる正定の因は、如來より賜はる「他力廻向の信心」ばかりであることを高潮せられたのであります。

惑染凡夫信心發、證知生死卽涅槃

九、「惑染の凡夫信心を發すれば、生死卽ち涅槃なりと證知せしむ」とは惑ひ易く、煩惱の毒の染みついた惑染の凡夫、つねに貪慾、瞋恚、愚痴に身心を驅使されて、迷界を離るゝことの出來ぬわれら凡夫、この凡夫も一度信心の燈火が我胸に點ぜらるれば、この生死轉邊の世界にあるまゝにて、直ちに不朽不滅の永遠の大生命を得て、常樂我淨無碍自在の如來涅槃の風光を、この罪の心の上に味ふことが出來るのである、これが往相廻向の相であります。

一〇、信心を得たるものゝ行くては既に定まつた、それはいふまでもなく、三種清淨二十九種莊嚴の淨らかにして明るい、無量光明土、即ち盡十方無碍光如來——不可思議光如來のまします、無量の光明の耀きわたる國土である、即ち阿彌陀如來の住したまふ眞實報土に生れるばかりであります。

諸有衆生皆普化

私達がかゝる圓滿なる佛果を成就するとき、おのづとすべての衆生を利益したいといふ愛他の大行となつて、直ちに煩惱生死の世界に還りて應化身を示して、あらゆる者を濟度するのであると示されたのであります。

曇鸞大師はかゝる高遠なる人格と、熱心なる傳道の御精神をもつて、天親菩薩の教を明らかに示され、それが我が親鸞聖人の上に輝き、今また私達の心の上に力となつて味ふことを得るは、まことに悅びのなかの悅びであります、私は、特に大師の著『往生論註』に最も深き親しみを感ずるものであります、その信念の幽玄なる、其の哲學的思想の深遠なる、つねにこの論註より、尊い光をあたへて下さることをよろこぶのであります。

第二十九講　第四祖道綽禪師と聖淨二門

道綽決聖道難證
唯明淨土可通入

道綽聖道の證し難きを決し、唯淨土に通入すべきことを明す。

道綽禪師

一、第四祖道綽禪師は、釋尊滅後一千五百十一年、即ち今より一千三百六十餘年前、唐の幷州の西河といふ所にお生れになつたのである、ちやうどそれが曇鸞和尚が逝かれてより二十年の後であつた、十四歲にして出家し、廣く佛敎を研究し、殊に涅槃宗に入つて、專ら『涅槃經』を繙かれたのである、而してこの經を講義すること前後廿四遍に及んだといふ、然るに、禪師は、この宗によつて全く

曇鸞大師の石碑をみて入信す

充たさるゝことが出來なかつたため、更に慧瓚禪師の下に參ぜられて、坐禪觀法の道を究められた、けれども、これにても未だ安住することが出來なかつた、ひそかに惱まれた揚句、石壁谷の玄中寺に登り給ひ、圖らずも其處にある村人の建た曇鸞大師の苦むした石碑の文を讀んで、禪師は、大に慚愧し、こゝに翻然として、今までの夢から醒められたのであります、「曇鸞和尚と吾とは、その智を比ぶれば、月と星との如く、その德をいへば珠と瓦との如きであるが、その曇鸞大師ですら、其智と德との賴まれぬ事を悟つて四論の講究もさしおきて、自力の修行を捨てゝ、偏に他力をたのみ、仙經を燒き捨てゝふかく淨土に歸し給ひしに、自分等如き智淺く、德卑しきものが、どうしてその御跡を傚らはずにをられやう」と、碑前にひざまづきて、はじめて他力本願に歸せられ、「仰ぎ願はくば、滅後の弟子と思めされて、哀愍攝護したまへ」と、心願せられたのであります、これが恰も曇鸞和尚歿後六十七年目である。

禪師の傳道

夫より今まで修學し給ひし、涅槃宗を速かに捨てゝ曇鸞大師の『往生論註』を指南として此玄忠寺に在住し、專ら他力信仰に基いて、靜かに往生の大行をつとめられ、稱名すること一日に七萬遍に達し、傍ら地方の老幼に他力念佛の謂れをすゝめられ、殊に『觀無量壽經』を講義したまふこと二百遍に及ぶ、師は極めて雄辯な方であつたらしく、爲に邪見にして信ぜず、これを毀謗する者も、一たび禪師の熱辯とその相貌の溫和なるに接しては、何人も歸伏せない者はなく、佛名を唱ふ者がつねに林谷にみちみてる有樣であつたといふ。

二、かく道綽禪師は、傳道に努めながら、一方に於て『觀無量壽經』に依りて『安樂集』二卷を著し、また一方に於ては當時の學者が懷いてをつた淨土敎に對する多くの誤解を正し、經文と道理とをもつて、專ら聖道の證り難きを示し、たゞ淨土の一門のみ通入すべき路であることを强く主張せられたのであります。

禪師は七十歲にして臨終の近づいたことを感ぜられて、其準備を整へられたが

珍らしくも再び健康にかへられ、新しき齒まで生えて、ます〳〵盛に教化に務められたが、遂に貞觀十九年四月二十四日、玄忠寺に於て病にかゝり、病床にあること四日、二十七日に至つて、集ひ來れる數多の同朋に圍まれ、靜かに西の空から輝き來れる白光に迎へられて目出度大往生をとげられたのである、時に御年八十四歳の老齡であつた。

道綽決聖道難證、唯明淨土可通入

三、「道綽聖道の證り難きを決して、唯淨土の通入すべきことを明す」とは、道綽禪師は末法の今日になると、聖道門の教では、とても佛になることは出來ぬことをきつぱりと決判し、たゞ淨土門でなければ救はれないことを明確に示されたのである、聖道門とは聖者がこの世にありて證りにすゝみいる道、淨土門とは愚痴の凡夫が阿彌陀佛の淨土に生れて成佛する教といふことであります、その聖道の證し難きことの理由として禪師は『安樂集』のうへに、

一に、大聖を去ること遙遠なるに由り、二に、理深く解微なるに由る、といふ

二理をあげてゐられます。

一に、「大聖を去ること遙遠なるに由る」とは、釋尊がこの世に在らせられる當時なれば、親しくお目にかゝつて教をうけ、或は御援助に依つて自力の修行も出來たかもしれぬ、また或ひは滅後暫らくの間なれば、其感化力に浴したこともあらうけれど、今や釋尊が亡くなられてから凡そ千五百年、末法の今日になると、もはや釋迦如來の感化力は次第に失はれ、餘德の輝きも薄らいでをるから、私達の如き根機の拙い者は、聖道自力の修行では、到底佛にはなることは出來ないのであることを示されたのであります。

二に、「理深く解微なるに由る」とは、佛法の眞理は深くして、智慧が餘程勝れてゐなければ、其意を知ることは出來ぬ、「短綆の深井に及ばざるが如し」で、眞理の水は深く智慧の綆は短いから、到底愚鈍のわれらが聖道の行の及ぶところではないと仰せられたのである、然しこの理由は決して禪師の獨斷ではなく、そ

れに就ては『大集經』に、

「我が末法の時の中の億々の衆生、行を起し、道を修むるとも、未だ一人として得る者あらず」と、是の故に『大經』には、

「若し衆生あつて、縱令、一生惡を造るとも、命終の時に臨んで、十念相續して我名字を稱へんに、若し生れずんば正覺をとらじ」と、說かれてある、この二つの證文を出して、聖道門の證り難きことを決して、淨土門の入り易いことを示され、以て龍樹菩薩の難易二道の對判と、曇鸞大師の自力他力の判決との上に、一段の明判を下されたのであります。

前二祖との異風

四、而して、龍樹菩薩の難易二道の對判や、曇鸞大師の自力他力の判決では、難行や自力では、「證ることは困難である」と、申してゐらるゝだけであるが、いま道綽禪師にいたりて「聖道の敎は、今の時には證り難し」と、斷言せられてゐる所が、前の兩祖とやゝ異つてをるところである、これは、前兩祖の時代は像法の世であつて、まだ釋尊の感化力もすこしは殘り、また聖道自力の修行をする人も多かつた時節であつたからである、けれども道綽禪師の時は、もはや末法の時代であつたから、かく思ひきつて斷言して、たゞ易行他力の淨土門に入るより外に道はないことを明されたのであります。

尼僧の訪問

五、私が以前に佛敎講話と題する個人雜誌を出してをつた頃であつた、それが緣になつて或る冬の日の夕方に私の會館へ、突然、京都の一友人の紹介狀をもつて、粗末な白衣と黑衣を着たまゝの、若い尼さんが訪ねて來られたことがあつた、とにかく其來意を聞くと、京都市外にある或る尼僧道場へ、十五歲の頃に出家して、八年間難行苦行をつゞけたが、尼僧生活の殆んど全部が、虛僞と、因襲と、妥協に滿ち〳〵て、人間の眞相に目醒めてみると、一日としてその生活に堪へられないので、その道場から獨り脫け出てきたのであるから、どうか救ふと思ふて私の下に置いてくれ、もし私が許さぬなれば疏水へ身を投げて此世を去る覺悟で

訪ねてきたといふのであつた、私は一寸面喰らつたが夜中のことであるし取りあへず、一室へ通し、二三日よく落ちついて考へなさいと申し聞かせて、その間に京都の方へ照會してみると、愈〳〵履歴も判明したので、それからこの尼僧の妙瑞さんは名を美津子と改めて私達の會館員の仲間へ入つて貰つたことにしたのであります、其時の物語りに、

「私の剃髪しましたのは、私の祖母と叔母との勸めで、一人出家せば、九族天に生るといふ打算的な迷信から強られて犧牲になつたのでムいます、當時十五歳の私には、尼僧生活がどんなものやら、佛の道がどんなものやら、そんなことの考へさへもない時で、赤いリボンをさした髪は、ムザ〳〵と剃り落され、それから草むしりやら、薪割りやら托鉢やら、讀經やら、それは〳〵男子も及ばぬ苦行を積まされ、冬の凍るやうな日に臺所の板の間に二日も三日も風にさらされて坐らせられる日もありました、僧院では毎日朝は三時に起きて、麥九米一のお粥に、

百日の化行

三切の澤庵の食事をいたします、また京都の町へ毎度托鉢に出ますが、美しい女性達から妙な侮蔑の目で眺められる時は、同じ女として幾度か我身の上を呪ひましたか、殊に「百日の化行」と申して、晝夜に喰はず寢ずに、百日の間一日に御膳に一椀づゝ御飯を頂いて修行いたします、それが五十日も辛棒すると、寢むたくて〳〵堪まりません、御經を讀み〳〵眠つてはならぬからといふので、左の手に燈し油をいれ、燈心をさして、火をつけて漸く眠りを覺ますのですが、まだ眠氣が催しますから、こんどは頭の上に線香を立てゝ頭を燒いて、とう〳〵百日の化行も辛棒しました、しかし、こんなことを、なんぼいたしましても、心の中はどうも變りはいたしません、やはり煩惱は、ちつとも止みません、心が沈まりますと、餘計に出家として人樣にお話の出來ぬ醜い心がみえすきまして、すこしでも倦んだいろがみえると師匠から壓制的に「尼僧ともあらうものが、出家の身が……」と、白い眼を向けられます、みんなの尼僧衆は、たゞ言はぬこと、聞かぬ

こと、何もかも自分の醜い心に蓋をして、表面のみを誤魔化して、大悟したやうに裝ふてゐるのです、本當に佛前に讀經しながら、修行しながら、全く自己の生活を糊塗してをるに過ぎないのでムいます、私は八年間こんな僞りの生活を繰返して來たのでムいます……」と、私は此物語りを聞きながら、いまの時にでもそんな修行をする宗旨があるのかなあと思ふて、疑ふほどに驚きました、私はこの時、「親鸞聖人の一義は、あながちに出家發心のかたちを本とせず、捨家棄欲のすがたを標せず、たゞ一念歸命の他力の信心を決定せしむるときは、さらに男女老少をえらばざるなり」の、御文章の御言葉は、決してよそごとではない、全く私一人への御教であることがしみじみと味はれました。

六、わが親鸞聖人が、叡山二十ケ年の聖道自力の修行に敗れて吉水の法然上人の門に入られて、念佛せられたのもこれより外はなかつたのである、御傳鈔に「難行の小路迷ひ易きによつて、易行の大道におもむかんとなり」と、仰せられた御意は全くこれであつたのだ、聖人自ら、道綽讃に禪師の卓見を鑽仰せられて、「末法五濁の衆生は、聖道の修行せしむとも、獨りも證を得じとこそ、教主世尊はときたまへ」と、仰せられました、生れ始めてより、臨終の夕に至るまで、惡業煩惱で日立ちした恐ろしき私達は、到底聖道の修行などは思ひも及ばぬことである、たゞ〳〵阿彌陀佛の本願一つに救はれて、淨土へ連れられてゆくより外に道はないのであります。

第三十講　萬善の自力を貶しめて念佛を勸む

萬善自力貶勤修　萬善の自力は勤修を貶しめ、
圓滿德號勸專稱　圓滿の德號は專稱をすゝむ。

三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造悪値弘誓
至安養界證妙果

三不三信の誨慇懃にして、
像末法滅同じく悲引す。
一生悪を造れども弘誓に値ぬれば、
安養界に至つて妙果を證せしむと云へり。

聖道の行
浄土の行

一、道綽禪師が、釋尊一代の「教」の相を、聖道、浄土の二門に分けられたことは、前述の如くであるが、この「教」の相には、それ〴〵違つた「行」が含まれてあります、即ち聖道門の教は、萬善自力の修行をすゝめ、浄土門の教は、圓滿德號の念佛の行をすゝめるのであります、然るに聖道の行は、萬の善根功德を自分の智慧と道德の力によつて勤めてゆかねばならぬ故、私達末世の凡夫の到底堪ゆるところでない、よつて、最も御德のすぐれたる南無阿彌陀佛の御名を稱へる、これば かりは、如何なる惡逆の凡夫でも、愚な者でも、何の造作もなく修められることが出來るから、凡夫不相應の聖道の修行を爲すよりも、わが機相應の念佛を稱へて、易く佛果を獲させて頂く事を勸められるのであります。

六度の行

二、私達が釋尊の教に從つて、自力の修行をなさんとせば、先づ順序として、「六度の行」といふものを修めねばならぬ、六度とは、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、の行である、即ち、あらゆる自分のものを人に施して惜まぬ行を布施といふ、釋尊の示されたる戒律を守る行を持戒といふ、如何なる困難に出遇ふても斷じて中折れせぬを忍辱の行といふ、寸時も油斷なく勵むのを精進の行といふ、内外の出來事に心を散らさず心を靜かにせる行を禪定といふ、眞實の證を開くべきこゝろを研くを智慧の行といふ、これらの行はなか〴〵容易でないことは分り切つたことである、己れの財產の半ばを割きて之れを人に施すことさへ出來ぬ慾深い人間では、布施の一行をも勤めることは出來ないのである。

三、叡山の西塔寶幢院の沙門道乘法師は、年若く出家して晝夜怠ることなく法

瞋恚の火焔

華經を讀誦した、けれども其性瞋恚の强い質で、同侶と諍ふことが屢であつた、或時激論の末、夢中に寺門を出で、はるかに叡岳を眺むれば、金銀珠玉を以て莊嚴した殊妙の樓閣がある、その中には、百千無量の經典が尊くも積み重ねられてあつた、奇異の思ひをなした道乘法師は、傍に坐した一老僧に向つて、この經閣は誰人の建立であるかと尋ねた、老僧は答へて、「これは道乘法師、卽ち汝が年來讀誦した經典の功德によりて、積まれたる經閣である」と敎へた、道乘の喜びは喩へんにものなく、歡喜の色は滿面にあふれた、やゝしばらくありて、何處ともなく火焔起り、見る間に經典の樓閣は、灰燼に歸してしまつた、驚いた道乘法師は、何の因緣によりて火焔起るやと尋ねた、老僧は答へて、「これ汝が折角讀誦經典の善根の行を積みながらも、起す瞋恚の火焔によりて、其功德は一時に燒滅せられたるなり」と告げた、これを聞いた道乘法師は懺悔の涙しきりにして、瞋恚の恐るべきことが骨髓に徹したといふ夢物語りがある、かくの如く積み重ねた、自力善根の修行も一念の瞋恚を以て一時に滅びてしまふのである。

それであるから、道綽禪師は、出來もせぬ自力の瘠我慢を張る聖道の修行を貶しめられたのであります。

萬善自力貶勤修圓滿德號勸專稱

四、之に反し淨土の行は念佛である、之を信じ之を稱へるだけであるから私達には最も相應したる行である、而もこの念佛の中には、阿彌陀佛の永劫の御修行中に於て、劫を積み德を累ねられたる、あらゆる、萬善萬行が缺けめなく圓滿に含まれてある所謂「圓滿の德號」であるから、一たび之を持てば、他力本願の御はからひによつて、易く佛果を獲させて頂くのであります、こゝをいま「萬善の自力は勤修を貶しめ、圓滿の德號は專稱を勸む」と申されたのであります。

五、しかしながら、この念佛の一行も、たゞおほやうに稱へては何の甲斐もない、御名を稱へるには、御名の思召しにかなうやうに稱へねばならぬ、それには信心が大切である、それについて曇鸞大師は『論註』に、如來の思召にかなはぬ

「三不の信心」と眞實のみ心にかなう「三信」とを擧げて、最も明らかに區別せられたのである、然るをまた道綽禪師は、この論註の味ひを一層ねんごろ(懇懃)に諭して下されたのであります。

三不と三信

「三不」とは、卽ち自力の信であつて、一に淳厚でなく、二に一心でなく、三に相續せぬ、この不淳と不一心と不相續心を以て稱へる念佛は、御名の思召にかなはないのである、これと反對に、他力より頂いた信心は、淳心であり、一心であり、相續心である、これは、ちやうど母の膝に抱かるゝ嬰兒が、すなほに(淳心)一心に、泣いてをる時も笑ふてをる時も、終始かはらず母を思ふ樣な心である、私達の煩惱妄念のなかにも、如來を信ずる心は、いつもすなほに、ひとすじに、いつも一貫してをる信心こそ、如來の思召にかなうのであると、禪師は敎へて下されたのであります。

卽ち、三信とは、

一―淳心―すなほな心―人間の心の中に混りけのない惠まれた心である。

二―一心―決定の心―何が間違ふても願力一つは違はぬと、他へ心の運かない決心である。

三―相續心―つゞく心―いつ思ひ出してもありがたい心が續いて下さる。

次に三不信心とは、

一―信心淳からず―若存若亡する故に―雜行雜修が混る故すぐに壞れて了ふ。

二―信心一ならず―決定なき故に―自力の計らひが止ぬ故ヒヨットの心が止ぬ

三―信心相續せず―餘念間る故に―いつも變りづめで永續きがせないのである

と、かくも丁寧に三不三信のすがたを誨へて、南無阿彌陀佛の思召にかなう信心を勸められたのである。

六、而して、この三不三信の敎をお說き下された曇鸞大師と道綽禪師の二師は像法と末法の時代にまたがつて、この世にお出まし下されて如來の大悲心を表し

像末法滅同悲引

て、我らをお手引下されたのである故、そこを正信偈に「像末法滅同じく悲引す」と仰せられたのである。

いま「像末」といふのは像法、末法といふことで、釋尊の御出世以來の偉大なる感化力を時間的にみて、四時に分ち

正法と像法

一―正法時代―釋尊滅後五百年間釋迦の教の通り修行して證を得る者の在た時代を云ふ、即ち釋尊中心の宗教の全盛時代を指すのである。

二―像法時代―釋尊滅後千五百年間―釋迦の教が殘つてをる故、それを修行する者はあつたが、證を開く者は一人もない、像とは正法時代をまねるといふ意味である。

末法と法滅

三―末法時代―釋尊滅後一萬千五百年間―釋迦の教はあるが、修行する者もなく、證を開く人もない、即ち釋尊の感化漸く力を失ふた時代をいふのである。

四―法滅時代―正像末の三時が終りて、僅かに殘れる釋迦の教法迄もなくなつた時をいふ、即ち聖道自力門のなくなつて、釋尊の感化力が全然無くなつた時代をいふのである。

而して曇鸞大師は像法時代の末期に生れ、道綽禪師は末法時代の初期に生れられたのである、故に、自分は釋尊の力によつては、もはや救はれなくなつた事を嘆かれて、そして、あらゆる時代をも貫いて、われらの凡てを救ふて下さるは阿

彌陀中心の宗教

彌陀如來中心の本願の宗教でなくてはかなはぬことを示されたのであります。

實にこの道綽禪師こそ、末法の時代に於ける人間の宗教、即ち凡夫の宗教をひらいて下された先驅者である、私はこの師を、七高僧に入れて慕はれた親鸞聖人の凡夫直入の信心をなつかしく思ふのであります、いま聖人が「像末法滅同じく悲引す」と仰せられた思召は、この阿彌陀佛中心の宗教は、像法の時の人も末法の時の者も、たとひ「法滅の時代」が來ても、みんな如來に誘引せられて、ひつぱられて生きるのであることを讃仰せられたのであります、『大無量壽經』には、

一生造悪
値弘誓、
至安養界
證妙果

「當來の世に經道滅盡せん、我れ慈悲を以て哀愍し、特に此經（彌陀の本願の教）を留めて止住すること百歳せん、其れ衆生有つて斯經に値ふものは意の所願に隨つて皆得度すべし」と、說かれてあります、仍て次に、

七、「一生惡を造れども、弘誓に値ひぬれば、安養界に至りて妙果を證す」

と、仰せられたのである。

私達は今現に末法の世に生れた者である、從つて聖道自力の教は、如何ほど有難きみのりであつても、其德益を蒙ることは到底出來ぬ、然るに幸ひにも、時機相應の本願の念佛に値ひ、如來より振りむけて下さる三信のお誡を頂いたならばたとひ一生の間、造りとつくる惡業は山程あつても、ひとたび阿彌陀如來の「助けるぞ」の弘き誓ひに値ひ奉り念佛を申さば、來世は必ず、安養界にいたりて彼の阿彌陀如來と同一の妙果をひらかせて頂くのであります。

八、數年前の花の眞盛りの四月の頃であつた、神戸より東位に當る或る寺で、盛んな宗祖の御遠忌のお座に招かれて行つた時である、私は其寺の庫裏からは大分隔つた「離れ座敷」の客殿に泊めて貰ふことになつた、この座敷は新築をいそいだ爲に電氣がまに會はぬといふことである、至極靜かであるが、座敷の裏には大きな池があつて、東側には塀に沿ふて澤山の墓が立つてゐる、ランプの火で薄氣味の惡い程淋しかつた、丁度三日目の午前の三時ごろと思ふ時、何の音もなくしてスーッと隣室から襖があいた、私はハッと思ひ、ふとんの中から樣子を窺ふてをると、七十餘りの白髮の婆さんが私の寢床に近づいて來るのである、私は急にふとんをはねのけて、いきなり「今頃何しに來たか」と、どなりつけた、婆さんは顏をしかめて、靜かにしてくれといふ、「何の用事で來たか、早く云ふてみよ」と尋ねると、「おやすみの所を、御迷惑とは思ひましたが、他人樣に聞かれては大變が起りますことで、どうぞ靜にしてお聞き下さいませ」といふ、「妾は實は今年七十二歳になります、私の亭主は七十六歳でムいます、妾が今の亭主に緣づいて

きましたは二十一歳の時で、夫から今年迄五十年間むつまじく暮してをります……」と語り出す、「それがどうしたといふのです、そんな話ならば、夜が明けてからしませう、今夜はお歸り下さい」といふと、婆さんは稍小聲になつて「いやその私が今の亭主に緣づく前に」と云ひながら涙をぬぐひ、稍暫らくたつて「先生、妾は、娘の頃に人知れず不義をいたしまして、お腹へ宿つた子供を二人まで墮胎した事がムいます」と云ふ、それを聞いて私もギョッとした、「そんないたづらをした妾を、今の亭主はちつとも知らずに今日迄妾を養ふて可愛がつてくれて居ります、妾は亭主にすまぬと心が苦しくて〳〵……」、「然しまた今日の先生のお話を承れば、如來樣は、妾の過去も現在も何もかも御存じとの事、私は怖ろしいやら恥かしいやら、こんな、闇から闇へ祕密を葬つたやうな妾でも、阿彌陀如來はきつとお助け下さるのでムいませうか、餘り話が有り難すぎて、どうしても眠られず、主人の寢てをるのを幸ひに、裏口から脫けて參り、私の心を打

あけて、こゝのところをハッキリとお聞かせに預りたくてあがりました、私のやうな者でも本當に助けて下さるのでせうか」と、詰めよつて來た、私は思はず襟を正した、夫より法衣に着かへて、御文章を押し開き、

「無始以來造りとつくる惡業煩惱を殘るところもなく願力の不思議をもつて消滅する謂れあるが故に正定聚不退の位に住すとなり、これによりて煩惱を斷ぜずして涅槃を得と云へるはこの意なり、此義は當流一途の所談なるものなり」と、讀んできかせ、また正信偈には「一生造惡値弘誓、至安養界證妙果」と仰せられてある、「婆さん罪はいかほど深くとも、必ず救ふべし」との仰せを眞受けにせよ、と本願の思召をいふてきかすと、婆さんは泣きくづれて喜んだ、「アヽこれで、全く安心をいたしました、何といふお手强い親樣でムいませうか」と合掌する、稍あつて、「もうこれで妾は歸ります、亭主に知られて、いらぬ心配をかけてはなりませぬから」と云つて出て往つた、星かげの中に念佛する老人の姿を見て、私も

思はず手を合はせて念佛した。

心を惱まし、身を苦しめ、親に反き、家庭を亂し、生活の總てを破壞するものは、すべて祕密の罪である、この罪に引きづられて無限に流轉せねばならぬのが私でないか、然るに今この罪の業繫を斷切る、本願の念佛、利劍卽是彌陀名號がめぐまれた、感泣せずには居られません、親鸞聖人は、和讃に、

「縱令一生造惡の、衆生引接のためにとて、稱我名字と願じつゝ、若不生者とちかひたり」と、讃仰せられました、まことに身ぶるひする程の罪業深重の一生造惡の徒者が、ひとたび此如來の弘き誓ひに値ひ奉れば、勿體なくも、未來には淸らかな無上の妙果を開かせて頂くのであります。

第三十一講　第五祖善導大師の功績

善導獨明佛正意　善導ひとり佛の正意を明にし、
矜哀定散與逆惡　定散と逆惡とを矜哀して、

善導大師

一、第五祖善導大師は、今より一千四百年前、支那の泗州に生れられた御方である、それは恰ど佛滅一千九百十二年目で、隋の大業九年、煬帝の代であつた、世は次第に正法、像法の時もすぎ、末法の世に入つて五濁の名を得て、恐ろしき惡業の時代となつたときである、大師は十歲の時に出家せられ、好んで『法華經』『維摩經』等を繙かれ、後、不思議にも『觀無量壽經』を讀まれ、終南の悟眞寺に入つて專らこれに依つて觀法を修せられたが、數年ならずして修行大に進み、極樂淨土の境界が目前に現はるゝやうに迄なられた、けれども大師はこれに安ん

觀法

道綽禪師に依て入信す

ぜず、遠く求道の旅路に上られ、唐の貞觀十五年、大師正に二十九歳の時偶晋陽に在つて淨土教を弘められてゐられた道綽禪師に謁ひ、『觀無量壽經』に依つて、眞實の淨土には自力我情の凡夫心では往かれない、ひとへに如來の御導きに依らねばならぬ事をきかせられ、それより五ヶ年間道綽禪師より教を受け、一日に一萬五千より三萬の稱名せらるゝ程の專修念佛の行者となられたのであります。

五會の式

其後、大師は長安に於て、盛に念佛往生を弘められた、長安の都の邊に一つの川があつた、大師はこゝに遊んで其水聲を聞きて深く感じて「五會の式」を創められて貴賤道俗に勸めて念佛を稱へしめられた、五會とは念佛の聲の調べを五つに分つて唱へることである。

大師の平生

大師は、自ら身をもつこと極めて嚴肅で、常に、酒を飲まず、目をあげて女人を見ず、横に臥し給ふ事がない、入浴の外は法衣を去る事がなく、平生樂しんで乞食をなし、美食は大衆に與へて、自身は粗食に甘んじ『阿彌陀經』を寫す事十萬卷、淨土の變相を畫く事三百鋪に及んだと傳へらるゝ、また受けたお布施は凡て塔堂の營造修繕に投じられた、都の人々は孰れも大師の德を慕ふて其教化を蒙らんとし、門前常に市をなしたといふことである。

大師の教化自殺者を出す

加之、大師の教化が餘りに有難かつた爲に、參聽者の中には、この世の濁れるを厭ひ、淨土の樂しさを慕ふて自ら其命を早めた者さへあつて、或は身を高嶺より投げ、或は深泉に入り、或は自ら高枝より墮ち、或は身を焚いて供養したものも少なからざりしと傳へられてあります。

京寶藏

大師の教化が滿都の人々に行渡り、孰れも肉食を廢した爲に、都の肉屋は渡世が六かしくなつてきた、時に「京寶藏」と云ふ肉屋は、大師の爲に己れの家業を失ふことゝなつた事を恨みて、大師を殺害せんとて、刄を携へて寺に趣いたが大師は其樣子の唯ならぬのを觀められて、西方を指示せらるゝと、忽然として淨

土の相が顯はれたので、京は嚴かなる氣に撲たれ、直ちに罪を謝して弟子となり終生念佛行者となつたといふことである。

行德が、かくも勝れ給へる方であつた爲、大師が念佛し給ふに當りて、時々光明が稱名の聲と共に其御口より出たと申すことである、されば尋常の凡人でなかつたことは大略之で察する事が出來るのである、古來大師を半金色の善導とも云ひ腰より上は尋常の出家の姿にて墨染の衣も着し、腰より下は紫摩黃金の光を放つてゐられたといふ、わが親鸞聖人は、大師の人格を仰ぎ「大心海より化してこそ、善導和尚とおはしけれ」と申されて、大心海卽ち阿彌陀佛の化現であるとまで尊まれたのであります。

二、大師出世當時の支那の淨土敎は、前に、曇鸞、道綽の兩師に依つて、他力の思召は廣く行はれたとはいへ、猶一方には、天台の智顗、淨影寺の慧遠、嘉祥寺の吉藏等の、自力の計度の加はつた淨土敎が盛んに行はれて、之等の人々は、

『觀經』を以て、凡夫の爲の敎でなく、聖者の爲の敎であると見誤り、觀經の本意は、稱名念佛にあるのではなくて觀念を勸めたものであるといひ、また釋尊が此經を說かれたる對手の韋提希夫人は、あれは實の凡夫女人ではなくて、生身の菩薩である、また此經に說かれてある佛及び淨土は、假に私達の迷ひの心に應じて現はれたる應身佛、應化の淨土であつて、眞實の佛、眞實の淨土ではない等と誤解して、全く觀經一部の御本意を誤解してゐたのであります。

三、そこで善導大師はいたく之を慨かれて、何とかして之を階定ねばならぬと思召された、然し、御經の註釋は、狹き私見やわが計らひを以てなすべきでない、先づ第一に、如來から直々に御指圖をうけねばならぬと考へられて、阿彌陀佛の尊前に跪いて「某、今この『觀經』の要義を顯はして古今を楷定せんと欲す、若し三世諸佛、釋迦佛、阿彌陀佛等の、大悲の願意に稱はゞ、夢の中にて靈驗を感ぜしめ給へ」と、願はれたところ、滿願の夜、如來及び淨土の御相を拜せら

毎夜化僧來たる

四帖疏

れ、喜びに堪へず、筆を執り稿を起し給ふに、其夜より、毎夜々々一人の化僧が夢の中に現はれて指圖をして玄義の科文を授けられ、こゝに全く觀經の註釋書が出來上つたのである、これを『觀經疏』と稱して『玄義分』『序分義』『定善義』『散善義』の四卷に分たれたのである、これをまた『四帖の疏』とも申します。

かくの如く、大師は如來の指圖によつて此經の正意を明され、この觀經は決してむつかしき觀念の法を敎へたものではなく、最も平易なる稱名を勸められたものである、また韋提希は斷じて生身の菩薩などではなく、心想の劣つた惡業の凡夫である、また、如來及び其國は應身應土ではなく、眞實の因位の本願に報いて現はれ給へる眞實の報身報土である、それ故この經は全く凡夫の爲の說法であつて、聖者の爲のものではない、佛の大悲は聖者よりも、主として「逆惡」の凡夫を愍みましますのであり、樂なものよりは苦ある者を救ひ給ふ御本意である、尤も一經の內には、觀念の「定善」や、道德の「散善」の行を說かせられてあるがこれを佛の本意に望むれば、たゞ「衆生をして、一向に專ら、彌陀の佛名を稱へしむるに在り」で、善導は他師に對して、「獨り佛の正意」を明らかにせられたのである、爾かもこの宣言は、決して自分勝手にいふのではない、佛の靈驗によつて叫ぶものである。

一字一句不可加減

「此義すでに證を請ふて定め竟んぬ、一字一句加減すべからず、これを寫さんと欲する者は、一に經法の如くせよ」と、實に動かすことの出來ぬ、大自信と大權威とを以て、佛の正意を明されたのであります。

善導獨明佛正意矜哀定散與逆惡

四、こゝに於て『觀經』の正意が普く世に知らるゝやうになつたから、定善、散善の行を修する人々も、自力の心を飜すと共に、十惡五逆の逆惡の凡夫もともに救はれてゆく宗敎が開かれたのである、この意を正信偈に「善導獨り佛の正意を明らかにして、定散と逆惡とを矜哀したまひ」と、仰せられたのである。

善導獨り

五、仍て「善導獨り」といふ意は、七高僧の中唯この善導大師ひとりと言ふ意

味ではなくて、すでに述べた、天台の智顗、淨影寺の慧遠等の諸師に對する語である、「佛の正意」とは、『觀無量壽經』を說き給ひて、本師釋迦佛の正意を明らかにし、本佛彌陀如來の本願の正意を明了にせられたことをいふのである。

定善と散善

「定散」とは、定善の機、散善の機といふ意で、定善の機とは、「定」とは息慮凝心と申して、種々のことに心を搔き亂さるゝことなく、一切の妄念を拂ふて觀經の十三觀の觀法を修して如來の淨土を觀奉らうとする哲學的善人をいふ、また「散善」の機とは、心を散亂して居る儘に、觀經に說かれたる、施、戒、行の三福、または十三觀以後に出てある九品の人々にて、佛の敎に從ふて惡を廢し善根を積むときは、臨終に阿彌陀佛の來迎を蒙り、如來の淨土に往生することが出來るのであると思ふてをる、道德的善人をいふのである。

逆惡

「逆惡」とは、定散二善の仲間入りの出來ぬ惡人凡夫、卽ち五逆十惡の人をいふ、さきに述べし如く、大師以外の高僧方は、觀經の利益はたゞ定散二善の聖者方のみに限らると說かれたるに對し、大師獨り、この經の利益はそれらの聖者方のみの蒙むるべきものでなく、それよりも、是等の逆惡の者が稱名念佛すれば、定善の者も散善の者も等しく救はれて往生することが出來るのである。

矜哀

「矜哀して」とは、憐みてといふことである、大師が、善惡の人々を氣の毒に思召してといふ意味である、卽ち定善散善の自力の善根は彌陀如來の本願に叶はずして、眞實報土の正因に非ざる事を哀れみまし〳〵て、定散二善の人々も自力を翻して、逆惡の凡夫と等しく他力を信じて稱名念佛して救はれるやうに勸められたのであります。

往生

六、更に大師は、往生の行儀を示さん爲に『法事讃』『觀念法門』『往生禮讃』及び『般舟讃』等の聖典を著はされ、唐の高宗、永隆二年三月の中頃、大師自ら二三日のうちに往生すると申されて、急いで、淨土の畫をかきあげ、其月の十四

日、六十九歳を以て往生せられました、高宗皇帝は、善導大師の徳を仰ぎ、師の寺に「光明寺」の號を奉つたのである。

まことに、其寺號の示すやうに、善導大師の念佛の生活は、全く佛のみ光の靈動であつた、このみ光は、大師滅後に於て、法照、少康等の諸師に依つて傳へられて、遂に遠く海を越えて日本に渡りて、源信を生かし、法然の魂と抱き合ひわが聖人に傳はつて、一層光輝をあらはしたのであります。

第三十二講　獲信の因緣と凡夫正機

光明名號顯因緣
開入本願大智海
行者正受金剛心

光明名號の因緣をあらはす。
本願の大智海に開入すれば、
行者正しく金剛心の受しむ。

慶喜一念相應後
與韋提等獲三忍

慶喜の一念相應して後、
韋提とひとしく三忍を獲、

獲信の方法

一、善導大師は、多くの淨土門内外の諸師に抽んでゝ、獨り佛の本意を明らかにせられ、定散の自力に迷ふてゐる者も、五逆十惡の凡夫も、共に阿彌陀佛の本願を信ずることによつて救はれるのであることを示されましたが、それについてその彌陀の本願を信ずるとは一體どうすればよいのか、その如來に救はるべき他力の信心を獲る方法に就て、大師は「光明と名號の因緣」によることを教へて下されたのである、則ち私達が如來に救はれるといふことは、それは如來の光明によつて育てられ、名號の謂れを聞いて信ずるのである、如來の光明は、ちやうど春の陽氣をもたらす日光のやうなもので、この日光が助緣となつて、草木の因から芽を出させるやうに、彌陀の光明が緣となつて能く明號の因を育てゝ、信心の

芽を出さしむるのであるから、少しも衆生の自力をさしはさむ餘地はないのであることを明かされたのである、これを大師は『往生禮讃』に、

「光明名號を以て十方を攝化し、但信心をして求念せしむ」と仰せられました。

光明と名號

二、私達の救ひの體である南無阿彌陀佛は、すでに十劫正覺の曉天に出來上つてゐる、然しそれが如來のお手許に出來上つた許りでは名號の手柄は現はれぬ、そこで、これを私達の衆生へお渡し下さるために、盡十方無碍光如來の光明を以て我等の胸のうちに來つて、無明煩惱の疑ひの闇を照し破り、如來の本願で出來上つた南無阿彌陀佛の「名號」のいはれを聞く身に育て、その名號が私の救ひの體であつたことを信じた時に、それが私達の「信心」となつて、往生成佛の願行を滿足せしめ給ふのであります、大師は其名號の謂れを、

「南無といふは歸命なり、亦是發願廻向の義なり、阿彌陀佛と言ふは卽ち是其行なり、此義を以ての故に必ず往生することを得るなり」と仰せられました。

子宮の卵巣と精蟲との如き

三、光明はわれらをして信心を得せしむるための、外緣となるゝものである、たとへば、子に對すに母の子宮の卵巣の如きものである、次に名號は、われらが其いはれを聞信せば、それがやがて信心となるもの故、之は信心に對する內因となり給ふものである、恰も子に對する父の精蟲の如きものである、かくの如く光明と名號とが內因外緣となつて、我等の往生の正因たる信心の子が生るゝのである。

光明名號顯因緣開入本願大智海

四、されば惡逆の凡夫も、ひと度この光明と名號の因緣によつて、久遠劫來の疑ひの暗がはれ、如來の本願にすがりて明信佛智の天地に出づることができた上は、定散二善の人々も惡逆の凡夫も共に區別なく、佛の大智慧海に入ることを得るのである、聖人は此意を「光明名號の因緣を顯はし、本願の大智海に開入せしむ」と仰せられたのである、「本願の大智海」とは、本願成就の名號を海に喩へられたのである、「開入」とは、開悟歸入といふことで、自力を捨てゝ、名號南無阿

彌陀佛を信ずることをいふのである。

信心のものがら

五、然らば、光明と名號との因緣によつてめぐまれた信心、卽ち他力信心とは一體どんなものがらであらうか、それを善導大師は說明して、その他力信心といふは「金剛心」である、「慶喜の一念」であると仰せられました、卽ち壞れない變らない、喜びに充ちた心だと申されたのである、自力の心で造つた信心は、壞れやすい變りやすい不安なものであるが、他力の信心は、もと〳〵名號の因と光明の緣とから生れたものであるから、みな眞如法性を體とせる如來の御胸から現はれたものである、どうしてこれが壞れたり變つたりする筈があらう、それは、ちやうど金剛石が、他の物によつても、どうしても壞れぬ如くである、而してまた、金剛石が何物をも破壞する力用があるやうに、他力の信心は、よくわれらの罪惡と迷妄とを打破つて、私達を眞實の大道に至らしむる力があるからである。

金剛石

六、そこで、行者が、正しくこの如來廻向の他力金剛の信心を受けたとき、それが如來の本願に相應して、今まで一度も味はつたことのない、大安心の「慶喜の一念」が、我が心に湧くのである、この一念の心の起ると同時に、私達の現實は、昔に變らぬ煩惱成就の凡夫であるけれども、而も佛の本願力によつて、永く生死の束縛を絕ち切つて頂く身となるのである、それは、昔大聖釋尊にまのあたり『觀經』の敎をうけて、喜忍、悟忍、信忍の「三忍」を獲た「韋提」希夫人と同等の信仰の天地に出ることが出來るのである、いまこの意を聖人は、

慶喜の一念

行者正受金剛心
慶喜一念相應後

「行者正しく金剛心を受て、慶喜の一念相應の後は、韋提と等しく三忍を獲る」と仰せられたのであります。

韋提

七、「韋提」とは、むかし釋尊御在世當時の、印度の摩竭陀國の國王頻婆娑羅の妃、韋提希夫人のことであります、頻婆娑羅王は王舍城の城主として、群臣に侍かれ、何不自由なく宮中に贅澤を盡して居られた、けれどもそれは外見的の果報であつた、內面的には或る淋しさを抱いてゐた、卽ち中年を過ぎても王妃韋提希

夫人との間に實子のないといふことは、堪へ切れぬ惱みである、其惱みを抱いて恐ろしい迷信に陷り、或る占師の言を信じて、某仙人の壽命が盡きたならば必ず皇子として生れるといふことをきゝ、仙人の命終の一日も早かれと念願したのであつた、けれども、仙人の壽命は尙三年の月日を待たねば盡きないといふことを聞き、老境に向ふ王として、どうして三年の月日が待てやう、無暴にも王は直に臣を使はして、其仙人を殺さしめた、其時仙人は「我が命未だ盡きざるに、王は心口を以て、人をして、我を殺さしむ、我れ若し王の兒とならば、還て心口を以て人をして王を殺さしめん」と、悲愴な一語を殘して死の刄にかゝつたのである。

仙人を殺す

この事件があつてから韋提希夫人は間もなく姙娠した、王は有頂天に喜んだ、けれども、仙人殺害といふ祕密の罪を思ひ出しては、到底安らかに眠ることは出來なかつた、人間が日々夜々になされてゆく心口意の三業の所は、すこしも緩みなく、苦惱から苦惱へと必ず引づゝてゆくのである、王は犯した罪の苦しさの餘り又占師に問ふと「此子は將來父王の敵となつて、怨みを晴らさうとする相がある」と言上した、此言葉を聞いて折角喜んだ希望は裏切られて、日々夜々に心の煩悶は增してきた、けれども、今はどうすることも出來ない、たゞ出產を待つよりほかに道がなかつた、遂に王子は誕生した、そこで生れると直に王は高樓から地上におとして王子を殺してしまうと計つた、而し命冥加な王子は、たゞ手の小指を折つたばかりで、命は助かつた、この王子こそ王舍城悲劇の張本人として父を殺し母を幽閉した阿闍世太子である。

祕密の罪

王子を高樓から落す

阿闍世太子

八、幽閉せられた夫人は、深く厭世の思ひに沈み、當時耆闍崛山に在ませし釋尊の方に向ひ、我がために佛弟子、目連、阿難を遣はして親しく敎を垂れ給へとひたすら念願したのである、釋尊は其心念をよく知ろしめして、王宮に降臨して韋提希のために、淨土の法門を說かせられたのが、則ち『觀無量壽經』一卷である

觀經の說法

る、此時釋迦如來は韋提に對し、語を改めて、

「諦かに聽け、諦かに聽け、善く之を思念せよ、佛當さに汝の爲に苦惱を除く法南無阿彌陀佛を分別解說すべし」と、宣まひて、暫らく默し給ひし時、夫人は仰ぎ見るに、空中に阿彌陀如來は、觀音勢至の二大士と共に住立し給ふ、韋提はこれを拜するや、この如來こそ、我れを助け給ふ大悲の御相ぞと知りて、たちどころに大悲佛心を領解し、往生一定といふ大安心に住したのである、この往生一定の信心を獲得する事を『觀經』に、

「心歡喜の故に、時に應じて無生法忍を得」と、說かれてあります、この無生法忍のことを善導大師は『序分義』に、

「無生法忍を得るを亦「喜忍」と名づけ、亦「悟忍」と名づけ、亦「信忍」と名づく」と仰せられ、久遠劫來さがしてゐた親樣に遇ふた歡喜の忍と、親の御意を會得した開悟の忍と、ひたすらに親の御力にたよつて動かぬところの信の忍との

三忍を獲たといふのである、つまり他力信心を得たことであります。

九、かくの如く釋尊が韋提希に向つて「苦惱を除く法」を、說くと仰せられながら、其御言葉と同時に、忽ちに、空中に阿彌陀佛が立たれたのであるが、其苦惱を除く法とは、卽ち南無阿彌陀佛の名號法である、卽ち法のまゝが空中に住立したまふ佛體であつたのである、つまり、名號のまゝが佛身と顯はれ、佛身のまゝが名號である、仍て、私達はたとひ韋提希のやうに、阿彌陀如來の佛身はまのあたり拜まずとも、南無阿彌陀佛の名號を聞信すれば、韋提とひとしく三忍の德を得るのであると、大師は敎へて下されたのである。（『信仰座談』眞宗の本尊に就てを參照あれ）

一〇、しかし、この三忍を獲ることは、信の一念に於て直ちに頂く御利益であるが、なほこの現在の利益の外に一層大いなる未來の利益をうけるのである、それは、私達が命の終るとき、卽座にこの穢れた身を捨てゝ法性常樂の涅槃の果を證らせて頂くのであると大師は、示されたのである。

即證法性之常樂

「法性の常樂」とは、平等無差別の理を證れる佛果涅槃をいふのである、この涅槃の德に常樂我淨の四德があつて、今「常樂」とは其四德の中の初めの二德を擧げられたのであります。

二種深信

一一、なほ、善導大師は、三昧發得の人と申して、前章で屢〳〵申した如く、實際に定に入つて定を實證する事の出來たお方であるのに、大師自らの信仰內容を告白して、

「一には決定して、深く自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沒し常に流轉して、出離の緣あることなし、二には決定して、深く彼の阿彌陀佛の四十八願をもつて、衆生を攝受したまふこと、疑ひなく慮なく、彼の願力に乘じて定んで往生を得と信ず」（散善義二種深信）と仰せられて卽ち、自分はたとひ信仰に這入つても、すこしも心は綺麗になるものではなく、如來に救はれる身になつてみれば却つて自分の罪惡のみが見えて、いよ〳〵助からぬ、參れぬ私であることが知れる、依つて助からぬ私は助かるやうな心になつて助かるのではなく助からぬ者を助けて下さるのが如來の御力と知れ、參れぬ者は參れぬ乍らで參らす御慈悲をたのむのである、卽ち助からぬ私を助からぬと知れたのが、助け給ふ佛心の謂れが知れたことである、いよ〳〵我身はわろき徒者と我機の知れたことが、救ふて下さる大悲が知れた時であると、大師は生涯、自身の闇の心の上に如來の光明を拜まれてゆかれたのであります。

一心正念の聲

一二、また、大師の信仰生活のうへには、

「汝一心正念にして、直に來れ、我能く汝を護らん」といふお言葉を、つねに如來から直接聞かれて、進んでゆかれたのである。

就人立信就行立信

また、「就人立信」、「就行立信」といふことを仰せられて、「就人立信」の「就人」とは、阿彌陀佛を指して、我信心は阿彌陀佛より直接給はつた信心であるから金剛の如きものである、依つて、人間や學者や菩薩や諸佛が出て來て、どのやうに

動揺させやうとしても、どうともならぬ堅固なものであると確信し、次に「就行立信」の「就行」とは南無阿彌陀佛の行を指すので、この名號は人法不二であつて、この南無阿彌陀佛が救ひの生きた如來であると同時に願なり行なりの、お淨土參りの因である、仍て名號六字は私達の救ひの親であつて、また救はれる法であると仰信せられたのである。

本願招喚の勅命

我が親鸞聖人は、この南無阿彌陀佛を解釋して、

「本願招喚の勅命なり」と仰せられ、この淺ましき罪惡のまゝに、この南無阿彌陀佛の名號から、如來の温かき御勅命を聞いて救はれてゆくのだとよろこばれました。

一三、譽田の聞思錄の中に、親雀がチユウ〳〵と鳴けば、子雀は直に親雀の許に飛んでゆく、チユウ〳〵といふ鳴聲は、子雀の來れの呼聲である、子雀にはチユウ〳〵の意味が通ずれども、人間には少しもわからぬ、人間同士でも、言葉が

違へば意味が通ぜぬ、英國の女親が Come here と呼べば子供が走つて親の側にゆく、Come here といふ言葉には、「此處にお出で」といふ意味がある、英國人にはわかれども、他國人にはわからぬ。

南無阿彌陀佛は、佛さまが「來いよ、來いよ」の御呼聲である「待ち兼て居るぞよ」のお呼び聲である、お慈悲を頂いたものには、一聲々々實に肺腑に徹して有り難い、然るに不信の人は、念佛の聲を却つて忌み嫌ふて、心地あしくするのである、念佛の聲の有り難さは信者でなくてはわからぬ、と誌されてあります、この南無阿彌陀佛の六字の謂れをはつきりと敎へて下されたのが善導大師であると思へば、深く御恩を喜ばねばなりませぬ。

第三十三講　第六祖源信和尚と厭離欣求

源信廣開一代經　源信廣く一代の教を開きて、
偏歸安養勸一切　偏に安養に歸して一切を勸む。

一、第六祖源信和尚は、日本最初の淨土教の高祖であります、尤も日本に於ては、今より一千三百八十餘年前、卽ち欽明天皇の第三年に、百濟から、阿彌陀佛の尊像一體が、海上に漂ふて、難波に着かせられた、之が我國の人々が大悲の尊像を拜んだ最初であつた、それから『三部經』及び、諸經論が日本の皇室に入りて、其謂れを聖德太子に依つて四方に弘められ、續いて天親、曇鸞、善導の三師の論釋も傳はり叡山の慈覺大師の如きは常行三昧堂をたてゝ念佛の行を盛んに修せられたのである、しかし之はたゞ自力の混つた一種の行として行はれてをつたに過ぎなかつたのである、こゝに於て、我源信和尚は、外に、天台の衣をまとひながら、內に本願の念佛を信じ、我日本に於ける、他力信仰の先驅者となつて顯はれて下されたのであります。

我邦他力信仰の先驅者

二、源信和尚は、今より九百八十餘年前、釋尊滅後一千四百二十一年、卽ち朱雀天皇　天慶五年、其生れ故鄕は世に名高き中將姬の曼陀羅のある大和國葛城郡當麻の里である、幼名を千菊丸といひ、その父は、卜部正親、母は淸原氏の出といふことである、和尚は、七歲の時に父に訣れ、それより、その時三十一歲であつた母の一人手に育てられたのである、源信和尚の千菊丸は或日、母君に語らるゝやう、「母上、私は昨夜夢を見ました、能く母上と參詣する高尾寺の觀音樣にお詣りしました、ところが御經藏の中に入つてみると大きなのや小さいのや、光るのや、暗いのや、澤山の鏡があげてありますから、私は夢の中に、側にゐられた僧に、一箇下されと申しました、その時、御出家は、小さな曇つた鏡を私に下

源信の幼時

さいますから、私はもつと大きな光つたのをと申したら、その僧の曰く、それをもつて横川に參り、能く磨けよと、いはれました」と物語られたのである、その時、母君は、「それはよき夢であつた、鏡は物を照らす智慧の相である、汝は、未だ幼くして無智であるのは、丁度鏡でいへば小さい暗いやうなものである、汝も覺えて居るであらう御父さんの御かくれになる時に汝を枕邊近く召されて、どうぞ出家して予が冥福を修めよ、との御遺言を、よつて御身もそのうちに立派な出家になつて、佛道修行に精を出さば、屹度汝の欲しがつた大きな光ある鏡を得られます」と、些々たる夢の判斷にさへ、ひたすら和尚の養育に心を注がれ、飽くまでも亡父の志を空しくせぬやう、と念じて居らるゝ母親の心が、此美しい傳說のうちにも讀まるゝのであります。

三、また、かういふ話も傳つて居る、大廻萬の行者といふて、比叡のある僧が大和巡りをして此當麻の里に來つた、其時里近く流るゝ小川の邊に多くの子供達

が思ひ〳〵に小石を一つ二つ、三つと數へて居るのをみて、僧は子供達に對し、一から九までは、何れも一つ、二つと「つ」のあるのに、十のみ「つ」のなきは如何と戲れ問はれたのである、その時、一人の子供がいふには、それは、五つに「つ」が二つあるからであると答へた、僧は、先づ其子供の頓智に驚いた、それから、僧には持鉢の汚穢を洗はばやと流れに臨むと、又其子の來つて、「御出家、その水は濁つてゐます、あちらに清い水が流れてをります」と申すから、僧は又戲れ半分に「諸法もと淨不淨なし、何ぞ清濁を論ぜん」といふた、子供は其時又聲に應じて、「諸法もと淨不淨なくば、何故に鉢を洗ふか」といふたのである、僧は益々その答を奇とし、遂に其子の家を訪ねてその子を貰ひうけることゝした、其子供は、いふまでもなく千菊丸であつて、僧と申すは比叡山天台宗第十八代の座主慈慧大師良源の弟子であつた、此時、源信は九歳の頃であつたといふ、この小話のうちにも、和尚の幼年時代を察することが出來るのである。

四、その後間もなく良源座主より使ひが來た、七歳にして父君を失はれた源信は、いま九歳にして母君に生別れ、母の心からなる衣を身に纏ひ、常に父の身より放し給はざりしといふ『阿彌陀經』一卷の入つた錦の袋を首にかけて、住みなれた當麻の里をたつて、雄々しく比叡山に登られたのであります、入山後は、もとより學業をはげみ、十五歳にして一山中、誰並ぶものなく、村上天皇の天曆十年六月には、勅命によつて八講の師と迄進ませられた、程なく、宮中に召出されて、陛下の御前で『阿彌陀經』を御講釋をなされた、天皇陛下には、叡感斜ならず、その時僧都の位と、布帛の恩賜をさへ下さつたのである、孝心深き源信和尚はさぞ故郷の母も之を聞いて悅ぶであらうと、事細かに恩賜の事情を認め、御褒美の布帛と共に、態々使ひを以て之を故郷の母人の許に御送りになつたのである、それが、普通の女であつたならば、その恩賜の布帛は、之を亡夫の位牌の前に供へて、心も亂れんばかりに悅びの涙に咽ばれたことであらうが、源信和尚の

恩賜の布帛

母上は、さういふ方でなかつた、我子に恐るべき憍慢の魔がさしたことを憂ひてその送つて來た恩賜の布帛には手もふれず、一通の手紙を添へて、我子の所へつき返されたのである、その手紙には「山へ登らせ給ひてより後は、明け暮れ心碎くるばかりに慕はしくおもひながらも、貴き法師となりたまふことゝ、それのみ樂みしに、内裏の交りをし、官位進み、衣の色をかへ、君にむかひ奉り、御經講讀し、御布施の物とり給ひ候ほどの、名聞利養の聖となりそこね給ふ口惜さよ、唯遇ひ難き優曇華の佛敎にあひぬればと思ひ入つて、後世たすかりたまふべきに、悲しくも一旦の名利にほだされ給ふ事、愚なる中の愚なる事、殊に口惜き次第あさましく候へ、之を面目と思ひ給ふは賤しき迷なるべし、夢の世に同じ迷にほだされたる人々に名を知られて何かはせん、永き後に悟りきはめて、佛の御前にて名をあげたまひかし云云」と、かくも嚴しく諫められたのである、是に於てわが源信和尚は、この母の返詞に感奮し、飜然として、これら浮世の榮華や名

和尚の發奮

譽のとるに足らぬことを覺りて、專ら自己の出離得脱の道を求められたのであります。

五、それより和尚は經藏に入つて釋尊の一切經を繰返して、披き見給ふこと五邊せられたが、未だ、眞實の安心に至ることが得ず、遂に山を下つては遠く伊勢の大廟に詣し、一途に神祖に祈られたところが、滿願の夜の夢に、一神女が「唯阿彌陀佛を念ずるに加かず」と告げられたことを感ぜられ、それより志を念佛一道に向けられたが、まだ決定の思にはなられなかつた、故にまた京に入つて六波羅密寺の空也上人を尋ねて、「如何にして淨土往生の志が成就せられませうか」と、問はれました、其時、空也上人は「厭離穢土、欣求淨土、この心さへ僞りなくば間違ふことはない」と、答へられました、和尚は之に深く感ぜられ遂に三十歳前後にして、斷然比叡山の北の奥、谷深く雲白き横川の楞嚴院に入つて專ら修道に餘念がなかつたのであります。

横川に入る

和尚の入信

果せるかな和尚は、道綽、善導、兩祖の御釋を讀み、且つ唐の懷感禪師の『群疑論』等を繙かるゝに從つて、和尚のたましひはだん〳〵と展いてきたのである、それは、たゞ念佛の一行によつて、極重惡人が、佛法の全分を完ふすることのできることが明らかになられたのであります、其意を、其著『往生要集』の序に、自己の信念を告白して、

「夫れ往生極樂の教行は濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰れか歸せざる者あらん、但し顯密の教法其の文一に非ず、事理の業因其の行惟れ多し、利智精進の人は未だ難しと爲さず、予が如き頑魯の者、豈に敢てせんや、是の故に念佛の一門に依つて、聊か經論の要文を集む、之れを披て之れを修せば、覺り易く行じ易からん」と、また、中程には「往生の業は念佛を本となす」と、また「極重の惡人には他の方便なし、唯彌陀を稱へて極樂に生まるゝことを得」と、確信せられたのである。

信念の告白

六、源信僧都は、最早入山三十餘年に達し、一度故郷に歸つて母の生育の恩を報じたく思ふて居られたが、母はなか〳〵故郷に歸るのを許されなかつた、歸つて貰はねばならぬ時は、必ず迎ひにやるからとて、請ふても願ふても許しが出なかつた、一日思はるゝやう、人命は無常である、何れか先に沒せば、悔ゆるも及ばじと、遂に意を決して永觀元年九月に山を降つて故郷に向はれたのである、然るに、途すがら、偶然か必然か、母からの手紙を持つた使者にあはれた、云く、

和尚故郷に歸る

「病甚だしければ、速かに歸り來つて臨終の善知識となれ」と、驚きて道を急いで歸られました、母は、病床に在て源信和尚の顏を見るや、且つ悅び且つ泣き、「迎ひにやると云ふた日が來た」との喜びを漏らされた、その時、「母上、念佛が唱へられますか」とは、佛門の孝子源信和尚が、三十年目に親子相あふた時の挨拶であつたのである、母上の枕頭に於て懇ろに念佛の一義を語り、往生に安心をさせ香湯を以て病室を洗ひ、自ら新なる淨衣を母君に着せて、靜かに共に念佛を唱へ

母の病床に侍る孝子源信

乍ら、其御往生を見送られたのである、その後、自ら母の終焉の圖を畫きて、源信和尚は一生涯肌身離さずにねられたとのことである、「あゝ、我をして行を修めしめし者は母也、母をして終をよくせしめしものは我也」とは、實に源信和尚の喜びでありました。

七、それより直ちに横川に歸られ、翌年十一月から筆を起し其翌年、卽ち寛和元年の四月までかゝつて『往生要集』三卷の聖敎を書きあげられたのである、それは御年四十五歳の頃であつた、この書を分つこと凡て十、諸經論の文を引くこと七十五部、廣く釋尊一代の敎を開いて釋尊の御本意、一代佛敎の根本精神は全く念佛の一道であることを明らかにせられました、其第一厭離穢土門に於て地獄餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道生死の厭ふべきことを詳しく示し、第二欣求淨土門、第三極樂證據門に於て、安養淨土の欣ぶべきことを述べ、第四正修念佛門以下に於て、廣く念佛の義を明らかにせられました、この意をいま正信偈に

往生要集

源信廣開一代經

偏歸安養勸一切

「源信廣く一代の教を開き、偏に安養に歸して一切を勸めたまふ」と讀まれたのである。

八、其他、源信和尚の著し給ふ聖教は凡て七十餘部、百五十餘卷あつて、漢詩和歌に至る迄、廣く內外の學藝に通じ、その一大信念は、極重惡人はたゞ彌陀の名號を稱へて、安養に歸することを一貫して勸めてゐらるゝのである、就中、『往生要集』は、遠く宋の周文德によりて支那に傳はり、宋人は和尚の德を仰いで東の空を拜み、源信如來と讚へた程であつた、また太宗皇帝は常に和尚の圖像を安置して、要集と共に日夜禮拜せられたのであつた、日本に於ても數多の文人武士が歸依し、平維茂、源滿仲など、皆和尚の前にて其罪を悔いて美はしき念佛の行者となつた、寬仁元年遂に病に罹られ、六月十日靜かに念佛しながらお淨土に旅だゝれたのであります、その時齡は正に七十六歲であつた。

源信如來の敎化

第三十四講　報化二土と心光常護

事雜執心判淺深
報化二土正辨立
極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見
大悲無倦常照我

專雜の執心淺深を判じて、
報化二土まさしく辨立せり。
極重の惡人は唯佛を稱すべし。
我亦彼の攝取のなかにあり、
煩惱に眼障られて見奉らずと雖も、
大悲倦無して常に我を照給ふといへり。

源信和尚の來迎寺に詣る

一、ある年の八月の十五日、私は叡山に登つて歸る途に、江州の下坂本の來迎寺に參詣したことがある、この寺は源信和尚が、此地に於て、彌陀の來迎を感じ其相を畫き、來迎の彌陀像を刻み、畫像と共に安置してある寺であります、この

地獄極樂の繪

寺には多くの貴重なる寶物があつて、特に源信和尚の筆になつた書、畫、佛像の多い事、夥しいものである、就中、『往生要集』の、厭離穢土、欣求淨土を教へられた十界の圖を眺めて、云ひ知れぬ深い響を感じさゝれたことである、繪解の僧の說教が、例の節入りで、餘りに物質的で、この偉大なる繪の前に立つて、なんの寢言を並べて居るのかと云ひ度い位であつた、繪解の僧は繪の形を說明して居るのだが、繪そのものが物語つてゐるものは實に久遠の宗教であつた、繪そのものが、如來の大慈大悲の喚聲であつた、私は靜かに合掌して南無阿彌陀佛と稱へるより外に、何ものもなかつたのである、源信和尚は『觀心要集』の中に、

「經に曰く、一人一日中に八萬四千の念あり、念々の中に作す所、皆これ三塗の業なり」と示されてあります、この「三塗」とは、私の現在の黑闇の胸を指して說明されたものである、卽ち地獄、餓鬼、畜生、は私の念々に燒いてゆく八萬四千の日々の煩惱の業火である、源信和尚は、この業火の恐ろしさを物語る爲に、未來永劫の地獄を告げざるを得なかつたのである、この一念の業火の起る所以は決して淺いものではない、一念の現在を說明するために往生要集に永遠の過去世より說き及ぼし、また未來世の上に顯はさゞるを得なかつたのである、然し、この地獄、餓鬼、畜生の自覺は、現在一念の業火の上にあらねばならぬのであります。

死出の相

二、「死出の相」として畫かれたる事が、餘りにも切實に私達の現實が描かれてありました、否、過去、未來、現在の痛ましい私の相を物語つてをります、「火の車」の繪を見た私は、どうして、それが死後のみの遠方に眺められませう、「火宅無常の世界」は外から私を燒いてゆく相でないか、「煩惱熾盛の心」は內から狂火が燃え上つてをる相ではないか、而してこの火宅は、くる〳〵と廻つて行く晝となり夜となり夏となり冬となり、燒かれて狂ふて火の車の廻つて行くまゝに

引かれて行かねばならぬ、この火の車は恐ろしき業報の鬼に引かれ行く、闇から闇へ、永久の地獄の道へ、方角も分らぬ此の闇路の底へ引かれて行く、此の囚れの業人の惨さよ、私はどうして火の車を死後のみの、來現とのみ思はれやう、地獄の猛火は決して此の現實を抜き去つた、未來と過去とのみにあるとは思へやう、この惨めな姿、この迷へる業の鬼に囚はれてゆく痛ましい現實、かうして落ちてゆく力を、何者が受けとめることが出來やう、三世十方の佛菩薩の御手にさへ受け止め給ふことが、かなはぬといふではないか、何たる力強い業火であらう、それが、如來の本願海の御心に映現せられたすがたが、この繪圖ではないか、この獄火の底へ投げ込まれた佛心こそ、げに五劫思惟の本願ではないか、必墮無間のどん底に、南無阿彌陀佛の念佛がまします、其慈父の熱涙、其の大悲の喚聲、私はこの「地獄極樂の繪」の前に立つて、血のやうな、大音宣布の如來の御聲に喚び立てられてゐることを感ぜずにゐられなかつたのである。

殺人強盜に襲はる

三、先年の秋、淺草の寺へ強盜が入つて、其の寺に下宿してゐた早稻田大學の學生を切り殺したといふことが、其の朝の新聞に出た、後で聞けば、肺に一刀をうけて卽死したので、其出血は非常なもので、實に悲慘な最後であつた、私は翌日淺草で、其話を聞いた時に胸が痛くなつた、而もだん〳〵聞いてみると、其殺された學生といふは、私がよく存じてゐる那須氏の令息であつた、親の心の痛々しさも想はれて、何とも申し樣がなかつた、それから數月の後、ふと夕方、淺草で那須氏に逢ふた、「何の用で東京へ來られましたか」と聞くと「息子を殺した犯人が、死刑に決せらるゝといふことを聞いたから、私から減刑を願ふてやり度いと思ふて出て來た」と申された、それは有難い事だと思ふた、「誠に貴方の痛いお胸の中は、とてもお察しすることは出來ませぬが、貴方は實際殺した奴を、可哀想ぢやと思ふて出てきられましたか」と聞くと、「實際、私の心を云ふて見れば、それどころか、八裂きにしてやりたいほどに思ひました、子を殺された親の心は

實に殘念であります」と云はれた、其の顏を見ると、毎晩、酒で其苦痛を打ち忘れやうとせられてをる氣色が見える、私は殺された子息よりも、其痛々しい親の心を見て泣かれて〳〵しかたがなかつた、思はず「恐ろしい業火は、貴方を燒いてゐますねえ、殺された御子息は一おもひの苦しみで終られたが、貴方は今、つれない業の鬼の手にかゝつて、切り刻まれてゐらるゝではありませぬか、貴方は今殺した奴の減刑を願ひに出て來られた、然し貴方自身をどうしたらよいのでせう、そこに根本の問題があると思ひます」と打とけて一夜を語らうた事がある。

業火もゆる我胸

四、これは加藤さんの話であるが、我身が燒かれてをり乍ら、我々の眼は恒に對岸の火事を凝視て居る、特に子を失ふた親に於て、この姿を見ると、まことにその通りである、業火に燒かれて惱み狂ふてゐる者は誰であるか、殺鬼の劍刃にかゝつて切られ刻まれてゆく者は誰れであるか、是をどうして子とか妻とかいふ對岸の火事と見做すことが出來やう、地獄の火の手は既に〳〵自分の足許まで燃えついて來てゐるではないか、黑闇の底に沈めば沈むほど、狂猛の業火に燒かれてゆく地獄の繪卷を、どうして私の現在の魂と切り離して眺むることが出來やうか、こゝに於て源信和尙の厭離穢土、欣求淨土のみ敎へは深く〳〵味はれ、「往生の業は念佛を本とす」と仰せられた思召がしつくりと會得されるのであります。

專修と雜修

五、しかし、いかに淨土を欣び求めても、「專修」と申して、專ら念佛の一行を修めて、淨土に往生せんと願ふ人と、又、「雜修」といつて、念佛一行だけでは何となう不足に思ふて、念佛の外に種々雜多の行を修めて、往生の因とせうとするものとの二種があります、善導大師は淨土往生の行を五正行として、第一に專ら阿彌陀如來及び其淨土をたゝへたまふ三部經を「讀誦」し、第二に專ら此如來の淨土を「觀察」し、第三に專らこの如來を「禮拜」し、第四に專ら此如來の御名を「稱名」し、第五に專らこの如來の御德を「讃嘆」し「供養」すること、この讀誦、觀察、禮拜、稱名、讃嘆供養、することを五正行と敎へられました、而し

五正行

正業と助業

てこの中第四の稱名が主であつて、他は伴である、即ち南無阿彌陀佛の御名を稱ふることが、佛の本願の業であるから、之を正定業といひ、他の四正行は助業と名づけて、正定業の稱名することを助くる業となるのである、即ち、讀誦等の四行を修むれば、夫が緣となつて、益々よく念佛することが出來るから、助業といふと善導大師は申されました、かくの如く專ら念佛する事を「專修」といふのであります。

次に「雜修」とは、上の五正行以外の雜多の善根功德を積んで極樂に往生せんことを願ふものをいふ、つまり他力の信心がなく、念佛一行の力をあやぶんで、他の善根功德によつて「助け」をさせやうとするものを「雜修」といふのであります。

そこで、源信和尙は專修の執心の人は、能く如來の本願に契ひ、其土臺を他力佛願の上に据えてをるから、其根底が深い、また雜修の執心は自力のはからひを

專雜執心判淺深

雜へてをるから、佛願に契ふてをらぬ、だから其根底が淺いのであると判決せられたのである、この意をいま正信偈に「專雜の執心に淺深を判じ」と仰せられたのである「執心」とは、執持心と云ふことで、即ち信心の事であります。

報土と化土

六、かくの如く、この世に於て、信心に深い淺いがあるから、また死後の果報に於ても、報土と化土の二通りに分るゝのである、「報土」とは阿彌陀如來の因位の修行に報いて現はれたる眞實の國土のことであつて之を報土といふ、又「化土」とは、其報土の中に在つて、衆生の機類に應じて化現したる國土のことであります、この化土のことを方便の淨土とも云つて、もとより淨土に二つはないが、信ずると(專修)、疑ふ(雜修)、との境ひ目で二つに分かれるのである、恰も、此世に二つはないけれども、法律を犯した者は監獄、普通の者は自由に我家で生活する如きで、皆こゝろの持ちやうで(執心)である、この意を源信和尙は、唐の懷感禪師の『群疑論』に依つて正しく辨別され、われらも化土に留まるやうでは誠に